
仮面ライダー 光の伝説

ホットコーギー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 光の伝説

【Nコード】

N5301S

【作者名】

ホットコーギー

【あらすじ】

ライダー大戦から1年数カ月後：
アギト、ブレイド、響鬼、NEW電王の4人の仮面ライダー達が世界の壁を越え集結した！
果たして、4人のライダーはなぜ再び集まったのか？
今、「光の伝説」が幕を開ける！

これは僕がアルカディアでも投稿している「仮面ライダー 正義の

系譜の続編」をコンセプトとしたSSです。この作品をよりよく仕上げたいため、恐れながら前作を削除させていただきました。平成から4人、昭和から4人と、計8人の仮面ライダーを主人公として物語を展開していきます。

昭和ライダーからの4人が誰なのかは、おいおい明らかにしていきます。

それと最近のライダー映画の風潮に習い、細かい設定は気にせず僕のやりたいように書いてしまっている部分もあるので、そういった整合性が気になる方にはオススメ出来ません。

ファイズをカットしました。理由はアルカディアにも書きましたがストーリーの円滑化のためです。ファンの皆様申し訳ありません。

プロローグ

ライダー大戦：全ての平行世界の融合から始まった、全ての仮面ライダー達の命をかけた戦い…

そして世界の破壊者・仮面ライダー・デイケイドによる全ての破壊と破壊から生み出される創造による世界の再生…

悪の秘密結社・スーパージョッカーをも巻き込んだ凄まじい戦いから、1年と数ヶ月の時間が経過した。

世界と共に蘇った全ての仮面ライダー達は皆、それぞれの世界での日常を過ごしていた。

ある者達は今なお戦いを続け、ある者達は平和となった世界で自分の人生を歩み、ある者達は新たな伝説を築きながら、それぞれの世界を生きていた。

ライダー大戦が終わろうとも、「仮面ライダー」の物語は途切れることなく、それぞれの世界で新たなページを開き続けているのである。

そして、あるいは「コレ」も、「仮面ライダー」という無数に存在する物語の、小説の1ページ目だったのかもしれない…

原因は何か？どうしてこうなった？

そんな物、聞くだけ野暮であろう。

なぜなら、どれだけ考えたところで完全に明確な答えなど存在するはずが無いのだし、その場限りの答えを見つけたとしても、それは無限に存在する回答の中の一つにしか過ぎない。

いくら回答を用意したところで、「闇」が全ての世界から消え去ることはなく、「悪」が我々を飲み込もうとすることを止めるはずが無いのだから。

だが、「闇」が人類を覆うとき、「光」もまた輝く。この世に「悪」がある限り、「正義の系譜」に終わりはない…
そしてまた、「正義の系譜」に名を連ねてきた戦士達の存在が消えてなくなるうと、「光の伝説」が途切れることも無いのだ。

…
「完全なる闇」…

陳腐だがこの場所にそれ以上の表現は必要が無かった。
辺り一面を真っ暗に染め上げるその闇の中はとても暗く、寒く…恐ろしかった。

まともな精神をしている者ならばその闇の中に足を踏み入れてしまっただけで体中の感覚という感覚が硬直し、何も存在しないという恐ろしさに心を壊されてしまうだろう。

この一帯に広がる闇は、体の自由と命の鼓動を失い、意識が完全に途切れた「死後」という誰にも待ち受ける完全なる「無」を再現したと言ってもいいほど何も存在せず、全てが漆黒に染められていた。そんな完全なる闇の中に、突如紫色の光が線香花火のように輝いた。その光は決して善き物ではなかった。

「悪意」を具現化したように不気味に輝く光はやがて不気味な「眼球」を形作り、その「眼球」は「喜ぶ」という感情を語気に含ませながら、抑揚の無い言葉を発した…

『再び時は来た…破壊による創造が…我に新たな命を与えた…か…』

「眼球」はその言葉の後に、自分が纏っている邪悪なオーラと同じ紫色の光を周囲に降り注いだ。

同時にさっきまで何も無かったはずの場所に無数の「異形の影」が現れ、不気味な咆哮を上げた。

その叫びは悔しさ、苦しみ、憎しみと言った負の感情で色濃く染められており、「完全なる闇」を「悪が蠢く闇」へと瞬く間に創り変

えた。

『しもべ達よ…「光」に破れ、「闇」に還された哀れな者達よ…私に仕えよ…全ての世界を全知全能の神、「創世王」の者とするのだ…！』

邪悪な意思…その姿…この「眼球」に付けられた名は、その者の姿と心をたった二文字で表していた。
その名は…「邪眼」。

…
とある世界の人気の無い浜辺…
海水浴シーズンを間近に控えたまだ人気のない砂浜に、突如揺らめきながら半透明に輝くオーロラが現れた。
そのオーロラの中から、サングラスをかけ、真っ黒な上着とズボンを着た長身の青年が現れた。
黒尽くめの服装の青年が姿を現した後、オーロラはまるで役目を終えたかのように消えると、青年はサングラスを外し、波の音が木霊する海の間を向こうを見つめた。

「ここか…」

青年は呟くと、目を細め、息を殺して自分の感覚を研ぎ澄ませた。
青年の本能は彼の脳裏に海の間を向こうに浮かぶ大きな島を映す。
緑が生い茂るその島の中心には、大自然には不釣り合いな印象のある巨大な施設が作られていた。
その施設は名も無い島に作られた物にしてはかなり近代的な造りをしていて、備え付けられた二本の塔がその施設を象徴しているかのようにだった。

「あれか…！」

青年はその基地を脳内の映像で確認した後、手に持ったサングラスを上着の胸ポケットにしまって海に背を向け、砂浜を去っていった。この青年の名は剣崎一真…またの名を、仮面ライダーブレイド。

…
かなり昔に稼働を停止した大きな廃工場の入り口の前に、一台のバイクが停まった。

バイクに乗った青年はヘルメットを外し、バイクから降りると、眉間に皺を寄せて廃工場を睨んだ。

「皆が集めた情報によると、ここか…！」

青年は手に持ったヘルメットをバイクのハンドルにかけると、ゆっくりと工場の中へと進んでいった。

「せつかく取り戻した平和なんだ。俺達が守らなきゃ…！」

青年の名は津上翔一…またの名を、仮面ライダーアギト。

…
人里から離れた大きな山の樹海の入り口…
ここにもまた、揺らめくオーロラが出現し、鍛えられた逞しい体躯をした男をここに運んだ。

「えつと…この山で良いんだよな？」

男は樹海の奥にそびえ立つ山を見上げながらそう言った。

「よし…まだまだ青年達には負けてられないし、俺も頑張りますよ
〜!」

男は陽気に鼻歌を歌いながら、樹海に向かって歩いていく。
男の名はヒビキ…またの名を、仮面ライダー響鬼。

…
広い平原の大地に、突如空からレールが敷かれ、巨大な電車がその
上を通り抜けた。

電車が通り抜けるとレールも消え、電車は空に空いた大きな穴へと
突入し、その穴も電車が車体を消すと共に消滅した。

電車が消えた後は、まるで何も起きなかったように辺りは静かにな
った。

ただ電車が通り過ぎた後の誰も居なかったはずの平原には、金髪の
少年と青鬼の姿があった…

「テディ、ここか？」

「ああ、間違いない。」

テディと呼ばれた青鬼は少年の質問に答えると、少年は凜とした瞳
をして再び口を開く。

「奴らの野望は止めなきゃいけない…行くぞ！テディ！」

「ああ！」

少年はパートナーの青鬼を連れ、平原を歩き出す…

彼の名は野上幸太郎…またの名を、仮面ライダーNEW電王。

こうして、4人の仮面ライダーが同じ世界、別の場所に集った。

4人が何故この世界に現れたのか？これから何が始まるうとしてい

るのか？

分かることは唯一つ、新しい「仮面ライダー」の物語の1ページが開かれた…今語ることが出来るのはそれだけである。

プロローグ（後書き）

電王つてついに良太郎まで消えちゃいましたね…僕は幸太郎のが好きですが…

というわけでプロローグを短く纏めました。

ぶっちゃけ翔一君って正義の系譜の当事者ですよねw

あのゲームの翔一は終始真面目モードで昭和の色にも染まっててかつこよかったけど凄まじい違和感がありましたw

本当にあのゲーム続編出てくれないかな…速水さんとか菅田さんとか椿さんとか…ライダーを愛してる俳優さんにちゃんとライダーを演じさせて欲しいですよ…

1話

オーロラを潜り抜け、「この世界」にやって来た仮面ライダーブレイド・剣崎一真は、ブレイドジャックフォームへと変身し、二本の塔が象徴的な謎の施設が建てられた島へと飛んだ。

目的地に到着したブレイドJFは、島の海岸へと6枚のオリハルコンウイングを畳んで着地し、変身を解除して剣崎の姿へと戻った。

「ここが、皆が言っていた場所のひとつ…一体あの建物は何なんだ？」

剣崎は、生い茂る森の向こうに見える謎の施設へと視線を向けた。事の発端は数日前：ライダー大戦の際に協力した仲間の仮面ライダー達からの連絡を貰った時であった。

「とある世界に怪しい気配が漂い、4つの人気の無い場所で謎の施設が稼動している」と連絡を受けた剣崎は密かに日本に向かい、ブレイバツクルとラウズアブゾーバー、13枚のスピードのプライムベスタを再び手にした。

そして3人の仲間達と合流した剣崎は、手分けしてそれぞれ別の場所に向かい、謎の施設の調査へと向かったのである。

「一体…あの施設は…?!？」

突如、剣崎の本能を鋭い衝撃が襲った。

その感覚を感じたのは一瞬であったが、それには今まで剣崎が感じたことのない凄まじい邪悪な意思が込められていた。

「この感覚は…なんだ？アンデッドじゃない…けど、とても邪悪で恐ろしい気配だ…」

それは剣崎がかつて戦ったアンデッドとも、ライダー大戦で見たシヨッカーの怪人達とも全く違う感覚であった。

しかし、それが何なのかいつまでも考えるわけにも行かないため、剣崎は前に進むことを決めた。

「…とりあえず、あそこへ向かおう。あの施設が何なのか確かめな
いと！」

剣崎は施設へと向かうため、海岸の先にある森の中へと進んでい
た。

岩陰から自分を見つめる青い上着とジーンズを身に付けた謎の男の
姿に気付かず…

…

森の中を歩いていた剣崎は、その地形に驚いていた。

真っ直ぐ歩けばすぐに施設に着くだろうと思っていたが、道は想像
以上に複雑であり、中々前に進んだ実感が感じられない。

知識が少ない人間がこの森に入ればすぐに道に迷い、遭難してしま
つてもおかしくは無い。

「なんて複雑な森なんだ…中々施設に辿り着けな…！」

突然、木の上から二つの影が剣崎の前に降り立った。

骨でムカデを組んだような意匠をした仮面に似た頭部と、漆黒のス
ーツをしたそれは、好戦的な気配を発しながら剣崎の行く手をさえ
ぎった。

この怪人の名は「マスカレイドローパント」。仮面ライダーWの世
界でミュージアム、財団Xといった悪の組織に使われていた戦闘員
である。

「お前達は！？」

剣崎は突然出現した二体のマスカレイドドーパントに驚き、二体は問答無用で剣崎に襲い掛かる。

剣崎はマスカレイドドーパントのキックやパンチを避けると、倒立後転で距離を取ってファイティングポーズを取った。

「お前達はあの施設から来たのか…邪魔をするなら倒させてもらっぞ！」

剣崎は俊敏な動きでマスカレイドに接近し、二体との交戦を開始する。

剣崎はマスカレイドが繰り出す攻撃を避けながら、拳や蹴りを敵の体に叩き込んでいく。

二体のマスカレイドは剣崎の動きについていけず、自分達の攻撃を避けられては剣崎のパンチやキックをその身に受け続けた。

やがて二体のマスカレイドドーパントは抵抗する力を失い、地面の上に倒れると、黄金色の光となって消滅した。

「これは…幻影か？」

マスカレイドドーパントは人間が変身した怪人ということを知っていた剣崎は、二体が人の姿に戻らず消滅したのを見て、それが幻影によって作られたものだと思察した。

一体この先で何が起きているのか？

一刻も早く調べなければならぬと改めて思った剣崎は、森の奥へと再び進んでいった。

…

それから二時間ほどの時間が経った…

マスカレイドドーパントは剣崎が行く先々で、時に一体、時に複数体と現れて、剣崎の行く手を阻んだ。

しかし剣崎はマスカレイド達の襲撃をもともせず、襲い来る敵を次々に返り討ちにしながら、森を進んでいった。

やがて施設が近くなり、剣崎は安心して肩を下ろした。

「ふう、ようやくここまで来たか。」

剣崎は森の出口へと向け一歩踏み出すが、その瞬間、突然上から無数の影が現れ、剣崎の前に降り立った。

マスカレイドドーパント達である。

「なっ!?!」

その数は今までの比ではなかった。

剣崎の前に今まで出現したのは多くても四、五体であったが、今回は十体以上が一気に出現している。

いくら不死身の「アンデッド」といえど、人の姿でこの数を一気に蹴散らすのは少し難しかった。

「…流石に、この姿のままでは、きついな。」

剣崎は苦笑すると、変身ベルト・ブレイバツクルを取り出し、スピードのカテゴリA「^{キス}チェンジビートル」のカードを取り出し、バツクルにセットする。

そしてそれを腰に当てると、カード状に赤いベルトが伸び、装着される。

ブレイバツクルは凄まじい音量で電子音を鳴らし、剣崎は手の甲を裏側にしながら、右手を斜めにゆっくりと突き出し、眼前で止める

と、右手首を勢い良く半回転させ、叫ぶ。

「変身ッ！」

その叫びと共に、剣崎は素早く右手を半円を描くように下げ、同時に左手を半円を描くように突き出す。

まるで両手でスピードを描くようなポーズを取った剣崎は、指で爪を構えるような形を作った左手は眼前でそのままに、そして下げた右手でブレイバツクルのレバーを操作した。

レバーが引かれると共にカードがセットされたバツクルは裏返し、その裏からは金色に彩られたスピードマークが現れた。

『Turn up』

電子音声と共にスピードが描かれたバツクルからは、バツクルと同じスピードマークが背中中に刻まれたヘラクレスオオカブトが描かれた青いスクリーンが射出された。

「ブレイドアーマー」を粒子状に分解し、その中に収納しているエネルギースクリーン、「オリハルコンエレメント」である。

「…うおおおッ！」

剣崎は、自分に向けてゆっくりと迫るスクリーンに向け、雄叫びを上げながら走った。

そして、剣崎はオリハルコンエレメントを潜り抜ける…

スクリーンを潜り抜けた剣崎の体には500分の1秒という速さで、金属系・ミスリルケプラーで編まれ、超金属・オリハルコンプラチナで精製された頑強な鎧を身に纏った強化スーツ・ブレイドアーマーが装着される。

剣崎一真は紫紺の戦士・仮面ライダーブレイドへと変身したのであ

る。

ブレイドの登場にマスカレイドドーパント達は驚き、後ずさった。仮面ライダーブレイドは走りながらブレイバツクルの左腰部に付いたホルスターから自身の名前を象徴する「剣」である「醒剣ブレイラウザー」を引き抜くと、恐れるマスカレイド達に斬りかかった。

「ハッ！フン！ウェイ！」

ブレイドは独特な掛け声と共にブレイラウザーを振るい、マスカレイドドーパントを次々と切り伏せた。

オリハルコンプラチナを極限まで研磨して作られたブレイラウザーの刃は襲い来るマスカレイドドーパントをもともせず、幻影で作られた敵を次々と光に変えて消滅させていく。

やがて最後の一体のマスカレイドドーパントを倒すと、ブレイドは再び施設へと向け走った。

：

ブレイドはまた度々襲い来るマスカレイドドーパント達を斬り捨てながら森を進んでいた。

マスカレイドドーパント達も銃やナイフ、剣と言った武器を使ってブレイドに立ち向かったが、やはりブレイドの相手ではなかった。そしてついに、ブレイドは施設の前まで辿り着いた。

「ふう、やっと付いた……」

ブレイドは今までの道のりの事を思うと、少し肩の荷が下りたような安心感を感じた。

だがここはまだ到達点ではない。

ブレイドは再び気合を入れなおすと、施設の園内へと足を踏み入れた。

…
施設の園内はアスファルトの地面が広大に広がっており、入り口までは結構な距離があった。

しかし、森の中と違って迷路のようになっている訳ではなく、真っ直ぐ歩けば入り口につけるため、戸惑うことは無かった。

「よし…このまま一気に施設に突入してやる！」

ブレイドは施設の自動ドアの入り口まで走り出した。

その時、凄まじい銃声が鳴り響き、発砲された無数の銃弾がブレイドを襲った。

「なっ…ウエア!？」

ブレイドの鎧に大量の銃弾が撃ち込まれ、大量の火花が上がる。

しかし、通常兵器ではブレイドアーマーを破壊することは出来ず、

ブレイドは鎧から煙を上げながらも、銃弾が飛んできた方角を睨んだ。

「誰だ!？」

ブレイドの視線の先には、剣が突き刺さったリンゴの周囲に四匹の蛇が纏わり付くという奇妙な絵をしたエンブレムを胸と背中に大小それぞれ貼り付け、所々赤いラインが目立つ黒い服を着た青年の姿があった。

青年はマシンガンを構え、冷淡な瞳でその銃口をブレイドに向けていた。

「お前は一体!？」

ブレイドは青年に向かって叫びながら問うたが、青年は再びマシンガンのトリガーを引き、ブレイドに向けて発砲した。ブレイドは後方にジャンプし、銃弾を回避する。

しかしブレイドが着地した瞬間、今度は青年と同じ服を着た少女と、鉄棍を持った凄まじい体躯の男が現れ、ブレイドに跳びかかった。

「ハッ！」

「オラアアアアアア！」

「何！？」

少女は身軽な体を駆使した格闘術、男は鉄棍を振り回すパワフルな攻撃でブレイドを攻め立てた。

ブレイドはとつさの攻撃に驚き、何撃か攻撃を受けてしまったが、やはりブレイドアーマーがそれでダメージを受けるはずもなく、ブレイドは二人の攻撃を受け流して無理矢理と払いのける。

すると次は、鞭を持った大柄の男がブレイドに襲い掛かった。

「ハイヤアツーーーーー！！！」

「チイッ！」

男は鞭を振るってブレイドを攻撃したが、奇襲に慣れたブレイドはその攻撃を見切って全て回避した。

「次から次へと…いい加減にしろ！！！」

ブレイドは再び男が振るった鞭を避けると、男の腹部に右足でカウンターキックを叩き込んだ。

「イヤ~~~~~ン！！！」

男は外見に似合わない気色悪い女言葉で悲鳴をあげながら、勢い良く吹き飛んでアスファルトに激突した。

「男の癖に気持ち悪い喋り方しやがって…っってしまった！？力を入れすぎたか！？」

ブレイドは、いくら奇襲を仕掛けてきた敵とはいえ、人間相手にライダーの力を使ってキックを浴びせてしまい、仮面に隠れた表情を青ざめさせた。

しかし、ブレイドの心配も杞憂に終わる。

蹴り飛ばされたオカマ男はゆっくりと起き上がって鞭を手から落とすと、くねくねと体を動かし、砕けた骨をゴキゴキと鳴らすと、何も無かったようにけろっとしてブレイドを睨んだ。

「もう！痛いじゃない！死ぬかと思ったわ！アンタ最低よ！どんなにイケメンでも絶対許さないわ！」

「…何だこいつは？」

ブレイドはまるで何も無かったかのように自分に向けて文句を叫ぶオカマ男を驚愕しながら見つめていた。

そしてオカマ男の周りに、青年と少女、鉄棍男が揃うと、四人の背後から新たな男の声が聞こえてきた。

「俺達は不死身の傭兵部隊「NEVER」…死体から作られた死なない兵士、「ネクロオーバー」で構成された死神の使い魔達だ。」

四人が間を空けると、そこには茶色の髪に数本の青いメッシュが入り、四人と同じ制服を着た男が歩いてきた。

男は四人の中心に立つと、聞きなれない単語に首を傾げるブレイド

に向かって不敵な微笑を浮かべる。

「何？「NEVER」…それに死なない兵士、「ネクロオーバー」だど？」

「初めましてだな…仮面ライダーブレイド、剣崎一真。」
「!？」

ブレイドは茶髪の男が自分の名を知っていることに驚くと、男はオカマ男に視線を移す。

「俺達だけがお前のことを知っているのはアンフェアだ、自己紹介をしよう。こいつは、泉京水。」

「よろしくね 異世界のライダーさん」

オカマ男…泉はまた気色悪い女言葉を使いながらくねくねと動いてブレイドに挨拶した。

次に茶髪の男は鉄棍男に視線を移す。

「こいつは堂本剛三…俺達の中で一番のパワーファイターだ。」

「へっへっへ…久しぶりの戦場だ。テメエをズタズタにしてやるぜ ええええええええ!!」

堂本という男は目を大きく開き、凄まじいテンションで叫んだ。

次に茶髪の男はマシンガンを持った青年に視線を移す。

「こいつは葦原賢…射撃をやらせたらこいつの右に出るものは居ない。」

葦原という青年は特に何も言わず、冷淡な表情でブレイドを見つめたままだった。

茶髪の男は最後に、少女に視線を移す。

「この女は羽原レイカ…ナリはガキだが、それなりに腕はいい。」

茶髪の男はレイカという少女を褒めたが、レイカはどこか悲しそうな瞳で男を見つめた後、俯いた。

そして仲間の紹介を終えた茶髪の男は、真っ直ぐブレイドを睨んだ。

「そして、俺は大道克己…ネクロオーバー第一号であり、NEVERの隊長だ…」

茶髪の男…大道克己は自分を含めたNEVERのメンバーの紹介を終えると、上着のポケットから変身ベルト・ロストドライバーを取り出し、それをブレイドへと見せた。

「お前…まさか!?!」

「そう…そのまさかだよ…!!」

大道はロストドライバーを自身の腰に当てるとバックルから黒いベルトが伸び、ドライバーが彼の腰に装着される。

さらに大道は「E」というアルファベットが刻まれた白いUSBメモリ状の物体を取り出し、それを構えた。

「永久」の記憶を封じ込めたT2ガイアメモリ、「T2エターナルメモリ」である。

「俺は…仮面ライダーだ!」

大道は高らかに宣言すると共に、メモリのスイッチを押した。

『E t e r n a l』

メモリから電子音声が響くと、大道はドライバーのスロットにメモリをセットした。

「変身…！」

そして変身の掛け声と共に、ロストドライバーのスロットを操作する。

『E t e r n a l』

二度目の電子音声と共に効果音が流れ、ドライバーから放たれた白い粒子が大道の体を包み込む。

大道の体は、体中に弾丸補充用のベルト状に備え付けられた大量のマキシマムスロットが特徴的な純白のアーマーに包まれ、「E」の文字を180度回転させたような3本のアンテナが目を引く仮面の黄色い複眼が輝く。

最後に、漆黒のマントが首元に生成され、長いマントが風にはためくと、大道は変身を完了した。

「俺の名は…仮面ライダーエターナル！」

「仮面ライダー…エターナル…！」

ブレイドは再びホルスターからブレイラウザーを抜刀し、エターナルは自身の武器であるナイフ・エターナルエッジを、風を切るような音を立てながら構える。

二本の塔が象徴的な謎の施設の前で、仮面ライダー同士の戦いが始まるうとしていた。

1話（後書き）

今回は、いよいよブレイドと組む昭和ライダーの登場です。

…といっても、青い服という単語でもう分かる人も居るかもしれませんが。

京水さんは書いてて楽しいですねw

しかし元々ゲームが原作ですからドラマ部分が足りてない気がして
ます…

ちなみに蘇る敵キャラは結構ランダムな部分があります。

どんなキャラが蘇るのかはお楽しみに！

ちなみに全話書いたとして26〜30話位までに完結できればな
と考えてます。

2話

無人島に作られた謎の施設を調査するため駆けつけた仮面ライダーブレイド・剣崎一真の前に、死なない兵士「ネクロオーバー」で構成された不死身の傭兵部隊・「NEVER」が立ちはだかった！

そして、NEVER隊長・大道克己はロストドライバーとエターナルメモリを使い仮面ライダーエターナルへと変身し、自らの武器であるアーミーナイフ・エターナルエッジの刃先をブレイドへと突き付ける！

お互いに不死身の命を持った青と白の仮面ライダーの激闘が、孤島に建てられた巨大な施設を舞台に始まるうとしていた！

「行くぞ…異世界の仮面ライダー…！」

「あいつ…来る…！」

エターナルは纏った漆黒のマント・エターナルロープをはためかせ、ブレイドへと跳びかかる。

「ハッ…！」

エターナルは上空からブレイドに向けて急降下し、エターナルエッジを振り下ろす。

ブレイドはその刃をブレイラウザーの刀身で防ぐと、エターナルは間髪居れずにキックを繰り出し、ブレイドの体勢を崩す。

そしてよるめいたブレイドに向け、隙の無いナイフ捌きでエターナルエッジを振るった。

エターナルエッジは、刃が振るわれるたびに「ヒュン！」という鋭い音を立て、凄まじい速さを持ってブレイドへと襲い掛かる。

しかし、数々の戦いを潜り抜けてきたブレイドも負けはせず、エタ

「エターナルが振るう刃の一閃一閃の動きを見極め、自身の剣で攻撃を防ぎながら、エターナルに応戦した。」

「エターナルは戦場と訓練で鍛えられた素早いナイフ捌きと格闘術を駆使しているのに対し、ブレイドは武術風の剣戟と格闘術を、天性の戦闘センスと今までの戦いの経験、そして研ぎ澄まされた感覚で駆使して戦っている。」

「全く違う戦闘スタイルで戦う二人のライダーは互いに一步も譲らず、互角の戦いを展開した。」

「ブレイドとエターナルはやがて互いの武器で鏝迫り合いになると、仮面を少し近づけて会話を始めた。」

「やるな…初見で俺にここまでついて来たのは貴様が初めてだ！」

「答える！ネクロオーバーとは一体なんだ！？あの施設は何の為の物だ！？」

「ブレイドの質問に対し、エターナルは白い仮面の下に隠された唇を緩ませて微笑し、答えた。」

「良いだろう、教えてやるよ！」

「エターナルはブレイドを押し返すと、後方にジャンプして距離を取り、アスファルトの上に着地した。」

「そしてブレイドの真つ赤な複眼をその黄色い複眼で見つめ、握っているエターナルエッジを数回転させて持ち直し、回答を言った。」

「ネクロオーバー…通称「NEVER」…俺達は命の輝きを失い、物言わぬ死体となった後、特殊な薬品やクローニング技術を駆使し、高い身体能力と不死身の体を得た無敵の兵士となった！俺達は人間ならば死ぬようなダメージをもとせず、既に死んでいるため寿命すら存在しない！正に、人智を超えた最強の生命体というわけだ」

「死なない…生命体…」

それを聞いたブレイド・剣崎は、彼らNEVERの存在に自分と似たような親近感を感じた。

経緯は違うものも、剣崎も滅亡の危機に陥った世界を救い、今や同じアンデッドである親友・仮面ライダーカリスこと相川始の願いを叶える為に、自らもアンデッドとなった。

辛く厳しい運命を背負い、死に行く事による安息を永遠に失った自分と彼らは、ある意味似たような生命体であると剣崎は思った。

しかし、次に続くエターナル・大道の言葉は、ブレイド・剣崎と彼らNEVERの根本的な違いを決定的に明らかにするものであった。

「そしてあの施設は…この世界の人類全てを一気にネクロオーバーへと変える為の光線発射施設だ！」

「何だって！？それはどういうことだ！？」

ブレイドが感じていた親近感は一気に消し飛び、エターナルは歪んだ笑みを仮面の下に隠したまま、再びブレイドの問いかけに応じた。

「あの施設の象徴である二本のタワー…あの天辺にはそれぞれ一基づつ、仮面ライダーに破れて消滅した俺達を蘇らせた「あるお方」が用意してくれた、人間をネクロオーバーに変えるための兵器、「スーパーエクスピッカー」が備え付けられているんだよ。」

エターナルは左手の親指で施設にそびえ立つ日本のタワーを指しながら言った。

「スーパーエクスピッカーは以前俺達が使おうとしたエクスピッカーの数倍の出力と性能を持った超兵器だ！原動力にT2メモリは要

らず、エネルギーの充填が終わり作動したら最後、二本のスーパーエクスピッカーから放たれた光線が世界中を包み込み、光線を浴びた全ての人間は晴れて俺達と同じネクロオーバー…って訳だ。」

「貴様！自分が何をしようとしているのか分かっているのか！？」

怒り心頭に達したブレイドは、エターナルに向けて叫んだ。

このNEVERという傭兵達は、全ての人間を自分達と同じ不死の怪物へと変えようと目論んでいるのだ。

永遠の命…それは死を恐れる必要がなくなるという魅力的で、素晴らしい物に見えるかもしれない。

しかし死の恐怖から解放されるというのは、夢のような永遠の命に存在するほんの少しのメリットにしか過ぎない。

尽きない命などもしも得た所で、将来死の恐怖すら霞むほどの地獄のような苦しみや悲しみを人に与えてしまうのである。

家族、友人、ペット…愛した者達に先立たれたとしても、自分ももう死ぬことは出来ず、骨となって愛する者たちと寄り添い眠ることも出来なくなり、流れていく時間の中に置き去られる…

そして長い時間をかけて世界がいつか滅びたとしても、その中でたった一人残され、何も無い世界を彷徨う…

言うだけならば簡単であり、普通ならば永遠の命など存在しないと断言されてしまうが、本当に永遠の命を持ってしまった剣崎は、その苦しみがどれだけ凄まじいものなのかを理解していた。

まだアンデッドになって数年しか経っていないものの、遠い未来の事を少し考えてしまっただけで気の狂いそうな重圧が日々、彼にのしかかっていた。

このNEVERという者達は、自分と同じ不死の苦しみを知っている筈であるのに、その精神が狂うほどの苦しみをこの世界の人間全てに与えようとしているのだ。

ブレイドは永遠の命をその身に背負った者として、NEVERの計画は許すことの出来ない悪魔の所業であった。

「貴様らは永遠に生き続けなきゃならない苦しみと悲しみを、この世界の人々全てに背負わせようとしているんだぞ！自分達が間違っていると思わないのか！？」

「ほう：貴様は、俺達と同じ不死身の化物として、賛成してくれると思っただがな。え？ジョーカー？」

ブレイドは再び驚愕に襲われた。

大道克己：仮面ライダーエターナルは、ブレイド・剣崎が、人為的に作られた者も含め55体存在する様々な生物の始祖たるアンデッド達の中でも、同じ個体が二体存在している何の生物の始祖でもない史上最強のアンデッド・ジョーカーであることを知っていたのだ。

「貴様：どうしてそれを…！？」

「フン、「あのお方」が教えてくれたんだよ。お前のこと「も」な不死の苦しみ：まあ言いたいことは分かるぜ。だが俺達は、その尽きない命を苦しく思っているからこそ、全ての人間を俺達と同じネクロオーバーにしてやろうと思ってるのさ！」

エターナルが指を鳴らすと、待機していた京水、堂本、葦原、レイカの四人がエターナルの周囲に並び、エターナルの右隣に居た京水は三日月に「L」の文字が刻まれた黄色いガイアメモリを取り出し、そのスイッチを押した。

『Luna』

「さっきのお返しよ！ビシッ！バシッ！叩いてあげるわぁ〜」

「！！」

京水は電子音声を発声したメモリを上空に放り投げると、メモリはまるで意思があるかのように京水の額に刺さり、体内へと吸い込ま

れた。

「うん！キタキタキタアーーーーー！！久々にキタアーーーーー！！！」

京水の体は両腕が触手のように長い黄金色の怪物へと変化し、体にくねくねと動かして変身した喜びを露にした。

京水はT2ルナメモリを使い、ルナドーパントへと変身したのである。

次に、京水の右隣に居た堂本が、鉄を模したような文体で「M」と書かれた銀色のガイアメモリを取り出し、スイッチを押した。

『Metal』

「克己と互角の相手たあ面白え…ぶつ潰してやるぜえーーーーー！！！」

堂本はメモリを前方に放り投げると、上着を脱ぎ、鍛え抜かれた上半身を晒した。

宙を泳ぐメモリは堂本の背中へと移動し、逞しい背筋に刺さると、彼の体内へと吸い込まれ、堂本の体をより頑強な「鋼」で出来た肉体へと変化させる。

堂本はT2メタルメモリの力で、メタルドーパントへと変身したのである。

次に、エターナルの左隣に居た葦原が銃の様な形で「T」と書かれた青いメモリを取り出し、スイッチを押す。

『Trigger』

「ゲームスタート…！！」

葦原は呟くと共に、メモリを放り投げて右手を開き、前に突き出す。

メモリは葦原の右手に刺さり、彼の体内に吸い込まれると、葦原の体はスリムなシルエットをした青い異形の姿へと変わり、右手は長銃へと変わった。

葦原はT2トリガーメモリの力で、トリガードーパントに変身したのだ。

最後に、葦原の左隣にいたレイカが、炎の形をした文体で「H」と書かれた赤いメモリを取り出し、スイッチを押した。

『Heart』

「克己：もう一度信じて、良いんだよね…？」

レイカは誰にも聞こえないような声量でそう呟くと、メモリを宙に放り、制服のジッパーを下ろして片方だけ手で開き、赤い薄着に隠れた上半身を少しだけ晒すと、メモリは彼女の首筋に刺さって吸い込まれた。

レイカの体はまるで炎が姿を持ったような女性的なフォルムの怪人へと変わると、どこか悲しげな様子でその場にたたずんだ。

彼女はT2ヒートメモリの力で、ヒートドーパントへと変身したのである。

「こいつらもやっぱり怪人か…！」

新たな怪人達の出現にブレイドはブレイラウザーを構えなおした。エターナルはそれを見て鼻で笑うと、先ほどの会話の続きを再開する。

「全ての人間がネクロオーバーになれば、人類が滅ぶことも無い。

取り残されて悲しむ者も居ない。どうだ？素晴らしいじゃないか？」

「ふざけるな！そんなの間違っている！」

「お話中悪いけど、行ってらっしゃい！」

突然、ルナドーパントが会話に割り込み、自分の幻影を操る能力でマスカレイドドーパントを数体作り出すと、ブレイドを襲わせた。ブレイドは、襲い掛かってきたマスカレイドがこのように作られたのだと確信すると、ブレイラウザーを振るって瞬く間に全て斬り伏せ、消滅させた。

エターナルは溜息をつくくと、ルナドーパントに視線を向けて注意を促した。

「京水：暴れたいのは分かるが話の途中だ。話の腰を折るな。」

「ごめんね克己ちゃん！でも嫌いになっちゃ嫌よ！嫌よ 嫌よ 嫌よ 嫌よ嫌っちゃう嫌あゝ」

ルナドーパントは平謝りをしながら可笑しな歌を歌うと、エターナルは改めてブレイドに視線を移して会話を再開した。

「間違っているだと？何がだ？貴様だって孤独は嫌なはずだろう。人間が全て永遠の命を持てば、孤独に苦しむことも、滅びを恐れることもなくなるんだぞ？なのに何が間違っているんだ？」

ブレイドは仮面に隠れた唇を噛んだ。

確かにエターナルの言うことは正しく聞こえるが、それはあくまで彼ら自身の「意見」であり、「考え方」であるのだ。

しかしブレイドが持っている「答え」も、所詮は個人が持っている「意見」と「考え方」に過ぎず、本当にそれを理由として答えている物か分からなかった。

結局ブレイドの「考え方」も人類全体が明確に出す答えではなく、個人の考え方から語られる意見に過ぎないのだ。

「俺はこいつらの考えを否定していいのだろうか？」

その迷いがブレイドに隙を作り、メタルドーパントとヒートドーパ

ントがその迷いから生まれてしまった隙を突いてブレイドに襲い掛かった。

「貰ったぜえええええええ!!」

「ハッ!」

「!?、しまっ…ウエア!」

メタルドーパントが豪快に繰り出すアイアンクローが、ヒートドーパントの滑らかな肢体から繰り出される素早い格闘攻撃が、反応が遅れたブレイドの鎧を攻め立てていく。

やがて二体がブレイドから離れると、今度はルナドーパントが両腕を伸ばし、鞭のようにしなやかに操ってブレイドを攻撃し始めた。

「アタシの柔肌を傷つけてくれたお返しよ!!ビシビシッ!!」

「クッ!!…くあっ!!」

ルナドーパントの鞭は変幻自在の動きでブレイドの体を殴打し、最後に巻きつけてブレイドを拘束する。

そして動きを封じられたブレイドに、トリガードーパントが右手の銃口を向け、連射式に銃弾を発砲した。

「うああああああ!!」

銃撃はブレイドに全弾直撃し、ルナドーパントはブレイドを拘束している腕を解く。

ブレイドは数歩後退してよろけ、そこに追い討ちをかける様にエタルナルが跳びかかった。

「さあ…地獄を楽しみな…!!」

エターナルはロストドライバーのマキシマムスロットに一角獣に似た文体で「U」と書かれた緑のメモリ・T2ユニコーンメモリをセツトし、スロットのスイッチを押す。

『 Unicorn Maximumdrive 』

電子音声と共にメモリのマキシマムドライブが起動し、エターナルの右手にエネルギーが集中すると、それは鋭い角状に形を変える。エターナルは急降下しながら、その角に似たエネルギーを纏った右拳をブレイドの胸部に直撃させた。

「うわあああああ!!」

ブレイドは後方へと吹っ飛ばされ、アスファルトに激突して何度もその上を転がった。

「グッ…!!」

だがブレイドは諦めず、ブレイラウザーを支えにして立ち上がった。

「負けるわけには…行かない…!!」

「…おいおい、よそうぜ兄弟。俺達は同属みたいなもんだ、仲間になれよ。俺達の仲間になればお前の世界の人間も皆ネクロオーバーにしてやる。そうすりゃお前も苦しまずにすむぜ?」

「黙れ!」

ブレイドはエターナルの申し出を払いのけ、再びブレイラウザーを構えた。

「お前達は間違っている…そして俺は…お前達とは違う!」

「…ならよお兄弟、その間違いと違いとやらを俺達に教えてくれよ？俺達は何が間違っているんだ？お前は俺達と何が違うんだ？教えるよ…ええ？」

ブレイドはそれに答えようとしたが、再びその答えも自分の個人的な考え方にしか過ぎない事を思い出し、また言葉をつぐんでしまった。

エターナル達も、ヒートドーパント以外は答えられないブレイドを嘲笑しはじめた。

だがその時、凄まじい覇気を含んだ声が周囲一体に響いた。

「迷うな！仮面ライダーブレイド！」

『！？』

ブレイドとエターナル達は声が聞こえた方角を反射的に振り向く。そこには、五十代後半から六十代初め位の年齢の印象がある、青い上着とジーンズを身に付けた黒髪の男の姿があった。

「あらあら！？何あの素敵なオジサマ！？ダンディなオジサマも嫌いじゃないわ！」

ルナドーパントは自分の質の悪い趣味をさらけ出すように叫んだ。そんなルナドーパントの言葉など誰も反応するはずも無く、ブレイドは呆然としたまま男を見つめた。

「貴方は、一体…？」

「完璧な答えなど、この世の何処にもありはしない！だから迷うなブレイド！お前はお前の「答え」を奴らにぶつけるんだ！お前の愚直なまでの優しさから生まれた「答え」は、ちゃんとした理由を持っている！」

ブレイドはその言葉にはっとした。
そうだ、自分の答えもN E V E R 達の答えも結局は不完全なのだ。
ならば、自分は自分の答えを相手に叩き付けるのみ…
ブレイドはエターナルを睨み、正義感にあふれた口調で敵の問いに
答えた。

「お前達は間違っている！確かに皆が永遠の命を持てば誰も孤独に苦しむことはないし、滅びる事を恐れることもなくなるかもしれない。けど！限り無い人生になんて、何の価値もありはしない！」
「何イ！？どういう意味だ！？」

エターナルは一步前に身を乗り出し、ブレイドに再び聞き返した。
ブレイドは今度は迷わず、真っ直ぐにエターナルの疑問に答える。

「人は生きている時間が決まっているから、与えられた大切な時間の中で必死に生き、時に悲しみや恐れを感じても、それを乗り越えて輝かしい人生を歩むことが出来るんだ！だから無限の命を手に入れたって、限られた時間を必死に生きる事を忘れた人類が、素晴らしい人生を送れるはずが無い！」

ブレイドは自分の答えを述べていく中で、仲間である仮面ライダーギヤレン・橘朔也が、以前ブレイド・剣崎の友人である白井虎太郎から聞いたという言葉思い出した。

「俺の友達も言ってた…人間は頭の上に少しの恐怖心や心配を乗せているから愛おしい、恐さを知らない人間は、一生懸命生きないって…虎太郎の言うとおりだな…」

ブレイドは脳裏にいつも牛乳を飲んでいた友人の笑顔を思い浮かべ

た。

そして次に、自分とNEVER達はどう違っているのかを、語気に覇気を込めながら答えた。

「それから、俺とお前達は似ているようで全く違う！俺が「あの時」出した答えが正しいなんて言えないけど、俺はどれだけ孤独な道を歩もうと運命と戦うって決めたんだ！孤独に負け、運命に抗おうともせず、拳句の果てに全ての人類を自分達の巻き添えにしようとしているお前ら「如き」と一緒にするな！」

「グツ…貴様あ…！」

ブレイドの答えを聞いたエターナルは、語気に憎しみと殺気を込め、拳をギリギリと強く握った。

それを聞いていた青い服の男は、微笑んでブレイドの隣に歩み寄った。

「そうだ、お前も仮面ライダーなら、自分の答えに自信を持て。」

「はい！ありがとうございます！」

ブレイドは男に礼を言うと、エターナルとルナドーパントは男を睨み、言葉を発した。

「貴様は一体何者だ！？」

「誰なの誰なの？貴方は誰なの？」

男はそれを聞いて不敵に笑うと、NEVER達に視線を向け、一歩前に出た。

「おっと…自己紹介が遅れてしまったな。俺の名は…神敬介！」

神敬介：そう名乗った男は、上着のボタンを外し、はだけた。ブレイドとNEVER達は、敬介の腰部に視線を移すと、驚愕の声を上げずにはいられなかった。敬介が上着の下に着ていた黒い薄着の上に、「X」という文字が刻まれた風車をバツクルの中心に備え付けた、白銀の変身ベルトが巻かれていたのである。

「そしてこれが、俺のもう一つの姿だ！」

両脚を広げた敬介は、次に両腕を真っ直ぐに上にあげ、ゆっくりとそれを水平に広げるように下ろしていく。

「大・変・身！」

その掛け声と共に、大の字を体全体で描くと、左手で握り拳を作つてそれをベルトの左腰部に添え、右手を斜めに突き出す。

「トオツ!!!」

そして空高くジャンプすると、敬介の体に青みがかつたグレーのスーツが装着され、頭には右、左の順に銀色の仮面「Xマスク」が被さると、口部にエネルギーの源ともいえる「パーフェクター」が装備され、凄まじいエネルギー光を輝かせる。

変身を完了した敬介は、ブレイドの隣に着地すると、開いた右手を突き出し、NEVER達に向けて叫んだ。

「仮面ライダー!!! Xツ!!!」

神敬介：またの名を仮面ライダーX…

悪の秘密結社・GODと戦った深海開発用改造人間・カイゾーグ…

そして、仮面ライダー第5号である！

2話（後書き）

まずい、ペースが思ったより遅い…話数延長は逃れられませんか…

平成で僕が一番好きなライダーがブレイドなら、昭和で僕が一番好きな仮面ライダーはXライダーです。

一番好きな組み合わせということもありますが、ブレイドとXを組ませたのには他にも共通点があるからです。

1つ、ブレイド役の椿隆之さん、X役の速水亮さんはお二方とも自分が演じた仮面ライダーに大きな愛情を持っている。

2つ、二人とも立場的に「仮面ライダー5号」

そして3つ、二作品とも前番組から大幅に視聴率を下げってしまったorz

えらく三つ目がネガティブですがそれでも私はブレイドとXが大好きです。

X1話の敬介が爆発する父の遺体を見て子供の頃父親と一緒に柔道の練習をした事を思い出すシーンと、2話の「人間じゃないってのも、いいものさ。」と子供に笑いかけるシーンは昭和ライダートッククラスの名シーンだと思います。（思い出すと涙が…）

ブレイドだってギャレン対伊坂、ブレイド対キング、最終回と評価は低くても名シーンはてんこ盛り！

視聴率と一般的評価で作品を否定されてたまるか〜！（落ち着け）

3話

「仮面ライダー…Xッ！」

神敬介：またの名を仮面ライダー5号・仮面ライダーX！

悪の秘密結社・GODと激闘を繰り広げ、闇の巨人・キングダークを倒し、世界を救った英雄である。

その伝説の英雄の一人・Xライダーが、異世界から訪れた後輩であり、別の歴史で見て「五つ目」の仮面ライダーである仮面ライダーブレイドを救い、死神の使者・仮面ライダーエターナルが率いる不死身の傭兵部隊「NEVER」を倒すため、長い沈黙を破り完全と立ち上がった！

「貴方は…Xライダー！」

ブレイドも、Xライダーの存在は知っていた。

ライダー大戦時、無数に存在する世界の中には、自分達9人の「平成仮面ライダー」と同じライダーの姿をした戦士達の姿もあった。

その中には自分達と「同じ」人間以外にも、名前や姿、戦う経緯も違っていた人間達も居た。（しかし名前や姿が違おうと、皆正義の心に燃えていた）

勿論、Xライダーを含む「昭和仮面ライダー」達にも並行世界は存在し、敬介達と「同一人物」や、名前も姿も違う者達がライダーに変身して戦う世界もあり、剣崎達もその世界や大ショッカーとの激闘、ライダー大戦で偉大なる先人達の活躍を目にし、共に変身した姿で悪と戦ったこともあった。

実も蓋もない話となるが、果たしてこの敬介が完全な「本物」の存在なのか？それとも「本物」と寸分の狂いも無い「戦いの道」を進

んできた「本物」と全くの同一人物である「別人」なのか？
そして今ここにいる剣崎も完全な「本物」なのか？それとも「本物」と全く同じ運命の上を歩いてきた「別人」なのか？

少なくとも、それが完全に明らかになることはこの物語では絶対に無いと断言できてしまう。

なぜならば、「仮面ライダー」とは「未知」の物語なのだ。

真実の掴めない物語に回答を求めたところで意味はないし、キリも無い。

第一、限度という物は個人差であるものの、全てが包み隠さず完璧に明かされ、一々理由付けが必要な物語に楽しみが見出せるだろうか？

人は精巧な物語を楽しむのもそうだが、物語に疑問や矛盾、破綻を見つけ、それについて議論し、批判し、時には笑いの種として楽しむ心も持っている。

分かる謎など、必要最小限で丁度いいのだ。

これを一人の考えとして取るか？それともただ単に語り部の怠慢と取るか？

この二つですら物語を目にする人々の受け取り方の自由なのである。

脱線してしまった物語を修正しよう。

Xライダーは自分の出現に驚いているブレイドを見ると、優しく、頼もしい口調で言葉を発した。

「驚く必要はないだろうブレイド。ここは、「俺達の世界」なんだ。

」

「あ…！？」

ブレイドはこの世界に到着する前、移動のために乗っていた時の列車・デンライナーでの出来事を思い出した。

…
ライダー大戦から1年と数ヶ月…そして危うく新たな世界の崩壊を
起こしかけたシヨッカーとの戦いから三ヵ月後…
再び仲間達と世界の壁を越えて再会した剣崎は、ヒビキ、幸太郎と
共に食堂車のテーブルに着き、「これから」についてのミーティン
グをしていた。

「伝説のライダー達の世界？ヒビキさん、俺達は今そこに向かおう
としているんですか？」

「ああ、そうだよ青年。その世界には俺…いや、俺達よりずっと長
い間世界を守り続けてきた先輩達の故郷なんだ。」

ヒビキは剣崎にこれから向かう世界の事を説明しながら、年長者の
彼には珍しい誰かを尊敬するような口調で言った。

しかしヒビキの隣に居た幸太郎は、彼がそんな珍しい口調を使っ
ても、今ヒビキが着ている服のままでは締まらないと態度で表すよう
に、クスリと苦笑した。

「それにしてもさヒビキさん、その服凄いな…」

ヒビキは幸太郎の言葉を聞いて眉間に皺を寄せると、明らかに不快
そうな態度を大人気なく取った。

「ちょっとちょっと二人共…俺だつてねえ、こんな着たくないん
だよ。京介には笑われるし、明日夢はマシユマ口見たいなほっぺた
がカチコチに固まっちゃうし…みどりの奴ったら全くもう、もつと
普通にデザインしてくれつての…」

ヒビキは、今自分が着ている服を見せた「鬼」の継承者として選ん

だ愛弟子・桐矢京介と、「人」の道を共に歩む者として選んだもう一人の愛弟子・安達明日夢の凸凹コンビが見せたりアクションを思い出してしまった。

彼が今来ているのは、まるで戦国時代の映画撮影で着る様な紺色の動きやすい和服なのである。

勿論ヒビキはこんなものを日常身に付ける趣味は無い。

この和服は、「鬼」のサポート組織「猛士」の技術開発員であり、ヒビキの幼馴染の女性・滝澤みどりが作った試作品なのだ。

「響鬼の世界」で猛士が発足するずっと以前：戦国時代まで話はさかのぼる。

鬼はこの頃から人を食う怪物・魔化魍まかもつと戦っていたが、この時代でまだ鬼は魔化魍と同じ異形の怪物として扱われていたケースが少なくなかった。

中には不当な扱いに心が砕け、悪の心に染まってしまった鬼戦士も居たという話まで残っている。

しかし、この頃の鬼は今の鬼と比べて優れていた部分がいくつかあった。

そしてその一つ、「衣服を失わない」という点に着目し、その服は作られたのである。

現在の鬼達は、変身する度に炎、風、雷などの変身の衝撃によって衣服を破壊され、戦いの後に顔だけ変身を解除できなければかなりの羞恥を味わうことになった。

しかし昔の鬼達は、まだ新しい衣服を購入することが経済的に大きな負担であり、生活力がまだ貧しかった戦国時代において、鬼の姿に変身しても衣服を失うことが無かった。

その体質によって、鬼達は経済的な負担を増やさずにすんでいたのである。

なぜ昔の鬼達の服が破壊されなかったのかは様々な説がある。

着ていたのが特殊な呪術などを施した服だったのか、それとも鬼の力の性質が現在と違ったのか：いずれにせよ明確なソースがはつき

りしていない為、完璧な真相は時代の闇の中である。

優秀な科学者であるみどりもどちらの説がより真相に近いか、あるいはこの二つの説ですら間違っているのかは分からなかったが、今回は先ほど挙げた二つの内、前者の説を参考にしてこの服を開発した。

猛士の中で呪術の扱いに秀でている鬼や、代々呪術を使って鬼のサポートや魔化魍への対策等をしているメンバーの協力や助言を全国から集め、古来から残っている資料などを参考にしながら、いわゆる「燃えない服」を開発した。

既にテストは何度も繰り返し返され、信用は証明されつつあったが、今回最終テストとしてヒビキが試着することになってしまった。

ヒビキは試着自体は構わなかったが、何分古い時代の説を参考に作られた服のため、デザインはまるで時代物の映画や舞台に出てくるような和服となってしまうていた。

ヒビキの外見は平均以上の30代後半の男性で、和服もよく似合っていたが、流石にこれで人前を歩いたり、異世界の仲間達に会いに行くのは抵抗があった。

しかしみどりの頼みを断ることは出来ず、予備に自分の私服を何着か持ってデンライナーへとやって来た。

食堂車に入った瞬間、デンライナーのオーナー以外の全てのメンバーが呆然としていた姿はヒビキの脳裏に焼きついてしまっている。

3人とは別行動を取り、すでに一足早く行動していた翔一にはまだ見られていないものの、この服を着たヒビキを見た翔一が能天気にならうのは非を見るより明らかであった。

しかし、そんなどうでもいい話を続けていても仕方ないと取ったのか、四人の談笑にオーナーが突然割り込んだ。

「みい〜なさん…楽しそうなのは結構ですがあ…今は皆さんにやって貰いたい事がありますので、おしゃべりは後回しにして頂きたいですねえ〜…」

『うわ！す、すいません！』

妙なオーラを放つオーナーに、3人は心臓を大きく脈打たせながら驚き、会話をやめてオーナーに注目した。

「それではナオミ君：準備を、お願いします…」

「ハ〜イ」

オーナーがステッキで床を叩くと、デンライナーの従業員・ナオミがキュートな笑顔を振りまきながら、地図を印刷した大きな用紙が貼り付けられたホワイトボードを持ってきた。

その話もまた真相がどうかなど分ならず、今は関係ないために放り投げて物語を進めよう。

オーナーはステッキをナオミに渡すと、自分はいつも自分が好んで座っている食卓に座り、用意されていたナオミ特製の旗付きチャールハンをスプーンですくって食べ始めた。

そして食事をしながら、詳しい説明を開始する。

「皆さんに今から向かってもらう世界は…あの伝説の仮面ライダー達が活躍した世界です…もう長い時間大規模な悪の組織による攻撃は収まっています、少し不穏な動きがありましてねえ。」

オーナーが言うと、ナオミは地図に書かれた四つの点を預かったステッキで指し示した。

「その4つの地点で最近妙〜なことが起こっているんですよ…突然何か分からない施設が出来た、使われていない工場に人気がある、そして…調査した人間が誰一人として戻ってこない…」

オーナーが陰のある雰囲気の説明を続けるうち、チャールハンに立て

られていた爪楊枝と紙で作られた旗が、米粒の量が減ったせいで倒れた。

オーナーはそれを見て瞼を大きく開き、ショックを受けた後、再び椅子から立ってナオミに歩み寄り、ステッキを受け取った。

「もう知つての通り、皆さんに集まってもらったのはこの四つの場所ので起きている異変を調査してもらつたためです…そして向かう先は伝説の戦士達の世界…ひよつとすると、貴方達の偉大なる先輩である伝説の仮面ライダー達に会えるかもしれませんねえ…」

「伝説の…仮面ライダー…」

自分達が戦うずっと以前から世界の平和を守るために戦っていた伝説の仮面ライダー達に会えるかもしれない…剣崎達はなんともいえない高揚を感じずにはいられなかった。

…

そしてついに剣崎一真・仮面ライダーブレイドの前に、その伝説の仮面ライダーの一人が現れた。

Xライダーは左手を差し出し、ブレイドに握手を求める。

「俺も怪しい気配を察知して飛んできたんだ。ブレイド、力を合わせて二人で頑張ろう！」

「はい！よろしく願います！先輩！」

ブレイドも右手でXの握手に応じ、共に戦うことを誓った。

以前、仮面ライダー達の心のより所であった優しく厳しい「おやっさん」こと立花藤兵衛はこのような事を言っていた。

「仮面ライダーは皆兄弟のようなものだ。初対面でも、離れていても、正義の心があればすぐに分かりあえる。」

その通り、ブレイドとXはほぼ初対面のような状況でも、悪を許さ

ず、正義を愛する戦士として理解しあうことが出来たのである。

「…チツ、仲良しこよしでガキみたいな友情ごっこか。下らん…！」
それを見ていたエターナルは、強烈な胸の悪さを感じた。

先ほどブレイドは自分達が行おうとしている計画に対して「人間から必死さを奪う無限の命に意味は無い」という理由で否定し、そして「不死者としての運命に抗うことをやめ、関係ない他人まで巻き込もうとしているお前達と俺は違う」と言った。

シリアスな啖呵を切ったのはいいが、今度は仲間の先輩仮面ライダーが現れただけで喜び、友情を結ぶ…

自分はこんな男に否定されたのかと考えると、エターナル・大道は怒りを感じずにはいられなかった。

自分達以上に孤独な運命を背負っている癖に自然な形で仲間を作ることが出来、自分の世界の仲間に出たいという儚い願いすら叶わない癖に泣き言一つ言わずに心は人間のままでいられる…

怒りと不快感は募り、「大道克己」は「剣崎一真」を否定したいという感情に襲われた。

以前、「お前は俺と似たようなものだ、仲間になれ」と利用するために説得し、親近感すら感じており、最後には自分に二度目の死を子守唄のように安らかに与えてくれた、「仮面ライダーW」の片割れである「地球の記憶」をその身に宿してしまった魔少年・フィリップと違い、エターナル（大道）がブレイド（剣崎）に感じたのはどうしようもない怒り、不快感…そして「もう一つの感情」だったのである。

否定したい…重い楔を背負っても子供のように悪意無く笑えるコイツを…

否定したい…化物となっても変わらず「人」であり続けるコイツを…

否定したい…自分達「NEVER」を否定したコイツを…
否定したい…コイツの全てを否定したい…
否定したい…否定したい…否定したい…否定したい…コイツそのものを否定したい！

エターナルは心の中でブレイドへの憎しみを滾らせると、大声でルナドーパントに命令を発した。

「京水！やれ！」

「任せて克己ちゃん！さあ…行つてらっしゃい！」

ルナドーパントは数十体のマスカレイドドーパントを作り出し、Xとブレイドに襲い掛からせた。

Xとブレイドは握手を解くと、ブレイドはブレイラウザーを構えなおし、Xはベルトのバックルから伸びる赤い突起を掴んで引き抜いた。

「ライドルホイップ！」

抜かれた突起は白銀に刀身が輝く剣となり、Xはその剣を武器として構えた。

仮面ライダーXの専用武器「ライドル」である。

ライドルは汎用性の高い鉄棍である「ライドルスティック」、鞭として扱う以外に敵の捕獲、緊急時の脱出等にも使用できる「ライドルロープ」、あらゆる物質を切断出来る凄まじい切れ味を持つ剣「ライドルホイップ」、ライドルスティックをより長くした形体の「ロングポール」といった変幻自在の武器になるのだ。

「ブレイド！傷は大丈夫か！？」

「大丈夫です！こんなもんで負けられませんよ！」

Xはブレイドの力強い言葉を聞いて後輩の頼もしさを感じ、「これなら大丈夫だ」と思つて首を縦に振った。

「よし…行くぞブレイド！」

「はい！先輩！」

ブレイドとXは二手に別れ、マスカレイドドーパント達に挑んでいった。

ブレイドは先ほど負つたダメージを全く感じさせず、力とセンス、経験によつて培われてきた戦い方でマスカレイドドーパント達をねじ伏せてゆく。

ブレイラウザーのオリハルコンプラチナで作られた刃が、時に剣戟と織り交ぜられる重いキックが、次々にマスカレイドドーパントを幻想の光に変えて消滅させた。

幻想で作られた雑兵の力で、紫紺の戦士の愛する人類を守るために振るう剣を叩き折ることなど出来ない…ブレイドの戦い方は見る者にそんな印象を与えた。

ブレイドは研ぎ澄まされた勇気の剣で影さえ切り裂きながら、世を脅かす悪と過酷な運命に立ち向かうのである。

そして伝説の仮面ライダーであるXライダーも、その称号に相応しい強さを余すことなく振るっていた。

Xは銀の仮面に備え付けられた真つ赤な複眼で敵を睨み、黒と黄色の二色で彩られ、「X」の文字が刻まれたマフラーを風になびかせながら、その手に握った白銀の剣でマスカレイドドーパントを次々に切り裂いた。

マスカレイド達は、どれだけ数をそろえても圧倒的な強さを見せるXライダーには全く敵わず、どんな武器を使つて戦いを挑んでも全

て斬り捨てられ、ライドルホイップの錆となった。
今は亡き愛する父の願いを胸にGODと戦い、世界を平和に導いた
Xライダーは、どれだけの年月があれから経ったとしても、生身の
部分が老いて鋼鉄の体についていけなくなるまでは、この世に悪の
ある限り、雲さえ越えて今日も行くのだ。

ルナドーパントが用意した大勢のマスカレイドは二人のライダーの
前に瞬時に敗れ去り、Xとブレイドは並んでそれぞれの武器を構え
た。

エターナルに取って想定内ではあったが、二人のライダーの戦闘能
力は思ったより凄まじい。

万が一を考えここは撤退し、スーパーエクスピッカーの稼動を優先
すべきであると考えたが、二人のライダーは怒りと戦闘意欲を隠さ
ずにこちらを睨んでいたため、すんなり逃げられる可能性も若干心
もとない。

そんな時、トリガード・パントがエターナルの前に立ち、右手の銃
口をブレイドとXに向けた。

「行け…俺が食い止める。」

「ああ…任せた。」

トリガード・パントは囷となり、仲間が逃げる時間を稼ごうとい
うのだ。

エターナルは躊躇いもせずトリガー・葦原の提案を受け入れたが、
ヒートドーパント・レイカだけは様子が違った。

「待つて克己！」

ヒートはエターナルにすがりつくような声でそう言うと、エターナ
ルは微かにヒートの方に視線を移した。

「何だ？」

「相手の実力は克己と互角、しかもこの世界の情報にあった「伝説の仮面ライダー」も一人いるのよ！賢だけじゃ死に行くのも同然よ！」

ネクロオーバー・NEVERは死なない命を持っている…なのになぜヒートがトリガーを心配しエターナルに意見するのか？

それはネクロオーバーの「不死の命」が凄まじい生命力を持っている一方、ガラスの様な脆さも持ち合わせているからだ。

ネクロオーバーは死体を基に作られたため、寿命や病気と言ったものが原因で死に至ることはないが、その体を保全するための「細胞維持酵素」を定期的に打ち込まなければ、その活動を続けることが出来ず、死体へと戻ってしまう。

細胞維持酵素については克己達を蘇らせた者が用意してくれているので問題は無いが、その他にもう一つ弱点がある。

それはネクロオーバーの耐久力を遥かに凌いだ攻撃を受け、体が限界を向かえて消滅してしまうことだ。

NEVER達は以前の戦いで仮面ライダーW、仮面ライダーアクセルのマキシマムドライブ、仮面ライダーオーズのスキヤニングチャージといった所謂「必殺技」をその身に受けて体が限界を向かえ、消滅して死んだ。

ライダーの必殺技を喰らえば不死身のNEVERといえど持たない…それはもうメンバー全員が知っている。

だからレイカは無駄に仲間を減らすより、もう少し全員で戦って時間を稼ぎ、隙を見て撤退してから施設内で迎え撃とうと考えていたのだが…

「…それで？」

エターナル（大道）の放ったその一言はヒート（レイカ）に恐ろしいまでの戦慄を与えた。

以前レイカが二度目の死を迎えたとき、克己は「お前は負け犬だ」とレイカを罵倒して突き放した。

その時の悲しみと恐怖が、蘇った今でさえレイカの中に残ってしまっているのである。

敗れた仲間達と共に三度目の生を受けた際、レイカは大道を信じていいものなのか迷う気持ちもあったが、もう行く場所も無く、戦う以外の術も知らず、裏切ったところで「あのお方」に消されて終わりなので、レイカは仲間達の元に残り、大道を信じるしか道は無かった。

だが、やはり大道の残忍になってしまった心に、死んだレイカ達をネクロオーバーとして迎え入れ、「友人」として見てくれた時の「優しさ」は残っていないかった。

今やもう、大道は自分達の事など武器のようにしか思っていないのである。

「どうしたのレイカちゃん？可笑しいわよ？」

「そうだけレイカよお！今までだって囮作戦なんか戦場で腐るほどやってたじゃねえか！」

ルナ（京水）とメタル（堂本）は、レイカが突然慣れているはずの囮作戦に反対した意図が分からなかった。

二人の言うとおり、今まで彼らは危険な囮作戦などなんども体験してきた。

ネクロオーバーも無敵じゃないという事を知っても、兵士など元々死を覚悟しなければならぬもの。

なのに今更仲間を失うかもしれないことを恐れるにしては、レイカは修羅場を潜り抜けすぎている。

だから二人はレイカの心情を察することが出来なかった。

「…違う…違うよこんなの…！」

ヒートは声を少し震わせながら呟いた。

そんなヒートの姿を見たトリガーは、普段全くといっていいほど使わない「言語」を使って声を発した。

「安心しろ…「あのお方」がより強い命をくれるまで死ぬつもりは無い。」

らしくもない態度を取るヒート（レイカ）を落ち着かせようと言ったつもりなのだろうが、逆に彼女は俯き、拳を握った。

「賢…なんで…皆、なぜなの…？」

他のメンバー達は全員、エターナル（大道）に道具として見られている事を知らない…もしくは知った所で気にしていないのだろう。

大道の本心をあの時垣間見ることが無ければ、おそらくレイカも京水達と共に未だ大道を信じていただろう。

だが一度彼に使えない道具のような目で見られたレイカは、迷いや悲しみを感じずに入られなかった。

それは彼女が周りの男達と違い、まだ年頃の少女であったことも原因なのかもしれない。

ヒートはもう一度エターナルを見つめると、消え入りそうな声で頼むように呟いた。

「お願いだよ克己…私達の克己に戻ってよ…もう一度、私達と「友達」になってよ…」

彼女の本心だった。

死んだ自分を仲間を迎え入れてくれた大道克己…

「過去が消えていくなら、俺はせめて明日が欲しい」と願い、必死に足掻き続けていた大道克己…

そして、レイカ達の友であった大道克己…

レイカは戻って欲しいのだ…ただあの頃の大道克己に…
しかし…

「…行くぞ。ここから二手に分かれる。京水と剛三は左、俺とレイカは右のタワーでスパーエクスピッカーを守る。」

「分かったわ〜 賢ちゃんすっかりお願いね！それと剛三ちゃん！ここからは私と二人つきりよ〜 楽しみましようね〜！」

「京オオオオオツ水！テメエ気持ち悪い事言ってんじゃ…うお！コ、コラ！もつと緩く…うあっ…！」

ルナドーパントはメタルドーパントの体にしがみ付いて触手で縛ると、高いジャンプ力を駆使して左のタワーの頂上に跳んで行った。そしてエターナルもヒートの肩を引き寄せ、ブレイドを睨んだ。

「おい兄弟！もし二手に分かれるつもりならお前は右のタワーに来い！もし頂上に辿り着けたなら、俺が相手をしてやる！」

「何!?!」

エターナルの突然の挑戦状にブレイドは一步前に身を乗り出した。

エターナルは感覚的に分かっていた。

与えられた情報によるとこいつははじめや落とし前をしつかりとつける男だ。

同じ不死の命を持ちながら自分達を否定したこいつが、その違いを証明するために挑戦状を受け取らないはずが無い。

必ず施設内の障害を乗り越えて自分の元へ辿り着くはずだ。

そしてしかるべき場所でこいつと戦い、どちらが正しいか決着を付

ける…

もし自分の所まで辿り着けなければそれまでの男であったということ…彼の信念を否定する十分な理由になる。

ブレイド（剣崎）とエターナル（大道）の決闘こそが、エターナルが望む地獄のシナリオであった。

「俺とお前のどちらが強く、正しいのか…そこでケリをつけようぜ！そしてこれは、始まりの福音代わりだ！」

エターナルは右手の親指を立ててサムズアップを作り、ブレイドに見せると、手首を90度反時計回りに回転させて親指の先を地面に向け、冷たく言った。

「さあ…地獄を楽しみな！」

エターナルはそう言うのと空しさに沈むヒートを連れ、タワーの頂上へとジャンプで跳んで行った。

残ったトリガード・パントは銃口から光弾を機関銃のように連射し、Xとブレイドを狙撃した。

「ブレイド！俺に任せろ！」

「はい！」

Xはブレイドの前に移動すると、ライドルホイップの柄に付いた四つのスイッチの内一つを押した。

「ライドルスティック！」

Xはライドルの形態をライドルスティックへと変え、鉄棍の中心を片手で持つと、まるでプロペラのように高速でそれを回転させた。

すると何百発もの無数の銃弾は全てライドルスティックに防がれ、地面に叩き落されてしまった。

「…！」

トリガードーパントは次に単発で威力の高い大きな光弾を放った。しかし今度はXに任せている内に一枚のカードを取り出していたブレイドが、先輩であるXライダーの前に立った。

「先輩！あれは俺が！」

「頼むぞ！」

ブレイドはXから信頼の言葉を受け取ると、カテゴリーフ「メタルトリロバイト」のカードをブレイルauザーにラウズした。

『Metal』

電子音声と共にブレイドは両手を広げて盾になるような姿勢をとると、ブレイドの体が鋼のように硬質化し、銀色に輝く。弾はブレイドに直撃したが、メタルの力で鉄壁の防御力を得たブレイドの体に光弾は効かず、傷一つ与えられなかった。

「チツ…！」

次にトリガーは銃を鈍器のように構えると、二人のライダーに格闘戦を仕掛けた。

トリガードーパントは格闘戦でも十分な戦闘能力を持っているのだ。しかし、二人のライダーはいきなり格闘戦に戦い方を切り替えた相手に動揺することなく、Xはライドルスティック、ブレイドはブレイルauザーをその手にトリガードーパントへと挑んだ。

「行くぞ！トオツ！！」

Xライダーは「トオツ！」という掛け声と共にライドルスティックを巧みに操り、鉄根を使った威力の高い打撃を何撃も何撃もトリガーの体に打ち込んでいく。

「うおおおお！ウェイ！」

ブレイドも凄まじい雄叫びと共に力強くブレイラウザーを振るい、重い剣戟をトリガーに浴びせていく。

世代を越えて並び立った二人の仮面ライダーの前に、トリガードーパントは手も足も出なかった。

幾らT2ガイアメモリで誕生したドーパントと言えど、共に戦うために集った仮面ライダーの正義の力には勝てるはずが無いのだ。

「グツ…ア…！」

トリガー・葦原は予想を遥かに越える力に成す術がなかった。

二対一の状況で自分一人の力で勝てはせずとも、時間を稼ぎ、撤退するぐらいは出来るだろうと考えていた。

しかし、自分と目の前にいるライダー達とは「力」の本質が全く違う。

Xとブレイドの力の源は、悪を許さぬ正義の心と人々を守りたいという思い…

悪に身を染め、人類全てをネクロオーバーに変えようと企むNEVERに、二人のライダーの力を推し量ることなど出来はしないのだ。しかし、寡黙なトリガードーパント・葦原はここで敗れようとも構わなかった。

とりあえず仲間達を退避させることには成功した。

今頃タワー屋上の頑強な扉はロックされ、ライダーでも破壊して入る事は不可能なはずだ。

それにタワーには施設の中からしか進入できず、簡単に通るほど施設のセキュリティは甘くない。

奴らが間誤付いているうちにスーパーエキスピッカーのエネルギーチャージが終われば…計画は成功する。

葦原に言わせるなら、大道達を逃がした時点で彼の勝利は決まっていたのである。

だが、仲間へ言った「死ぬつもりは無い」という台詞は嘘となってしまう…

もしも葦原に悔いという物があるなら、ただそれだけだった。

やがてトリガード・パントはライドルスティックとブレイラウザーに突き飛ばされ、アスファルトの上を転がる。

そしてなんとか右手の長銃を杖代わりにしてゆっくり立ち上がったが、既にライダー達はトリガード・パントにトドメを刺す準備に入っていた。

「ブレイド！トドメだ！二人のキックを奴にぶち込むぞ！」

「はい！」

ブレイドはブレイラウザーのカードトレイをオープンし、カテゴリ15「キックローカスト」、カテゴリ6「サンダーディーア」のカードを抜き出すと、ブレイラウザーにラウズする。

『Kick!Thunder!』

ラウザーからの電子音声と共に、プライムベスタを使用する際に必要なブレイラウザーのチャージ残量・APが消費され、それぞれのカードに描かれたイナゴとヘラジカの絵柄が青い紋章となって現れ、ブレイドの背後に躍り出る。

ブレイドは腰を低くした後、体全体をひねる様に動かしながらブレイドを高く掲げ、その後一気に地面に突き刺した。

同時に二つの紋章はブレイドの体へと吸い込まれると、スピードマークとヘラクレスオオカブトをモチーフとした仮面はブレイドのカラーである青と対比するような赤に一瞬輝き、額のシグナルが緑に輝く。

『Lightning blast!』

最後にラウザーから必殺技の名が電子音声で流れると、ブレイドはジャンプし、空中で一回転して右足を突き出し、キックポーズを取ると、ブーツの裏に刻み込まれたスピードマークが赤く輝きながら凄まじい雷を発した。

「トオオオオオオオツ!!!」

Xも雄叫びと共に空中高くジャンプし、体全体をX字に開くと、改造された体がエネルギーでスパークする。

そして空中で一回転し、トリガードパンツに向けて跳び蹴りの姿勢をとった。

「Xッ!キーーーーーック!!!」

「ウエーーーーーイ!!!」

Xライダーの基本であり、強力な武器でもある必殺技「Xキック」、そしてブレイドがカテゴリー5+6のコンボで発動する必殺キック「ライトニングブラスト」:

二人のライダー:「ダブルライダー」が同時に放った必殺キックは、トリガードパンツの胸部に力強く突き刺さる:

トリガードパンツは蹴り飛ばされて再び地面に激突し、大きな爆

発に包まれた…

…
戦いの後、ブレイドはガイアメモリが抜け、人間の姿へと戻った葦原に駆け寄り、彼を抱き起こした

「おい！しっかりしろ！」

敵ではあったが、同じ不死の生命体…苦しんでいる者を見過ごすなどブレイドには出来なかった。

「あいつ、敵の心配までするのか…殊勝な奴だ。」

Xライダーは敵にまで情けをかけるブレイドの優しさに感心と少しの不安を抱きながらそう言った。
ブレイドは何度も葦原に声をかけ、彼の意識をしっかりと持たせようとする。

「どういうことなんだ！？お前達は不死身じゃないのか！？」

ブレイド・剣崎は戸惑っていた。

彼らNEVERは永遠の命を持っていると言った筈なのに、ダブルライダーの必殺技を受けた葦原の生命力をアンデッドの力で探った瞬間、彼の命の鼓動は徐々に小さくなり、消滅しつつあることが分かったのだ。

葦原は薄れ行く意識の中でブレイドの戸惑う姿を目に映すと、ニヤリと笑い、消えそうな声で呟いた。

「ゲーム…クリア…ボーナス入手…失敗…」

ゲームクリア：克己達が退避する時間を稼ぎ、ブレイドに後味の悪さを感じさせた自分を賞賛する言葉…

そしてポーナス入手失敗：自分が生き残るというポーナスを達成できなかった自分の仕事の詰め甘さを悔いる言葉であった。

やがて葦原は体中の細胞が分解されて黒い粒子となり、まるでそこに何もなかったかのように消えていった…

「そんな…！」

ブレイドは敵だったとは言え、同じ不死の命を持った葦原が消えたショックを隠すことが出来なかった。

そして消えた葦原の傍に落ちていたT2トリガーメモリを拾うと、それを寂しげに見つめる。

その様子を見ていたXは、葦原の様子から一つの回答に辿り着くと、ブレイドにそれを伝えた。

「どうやらあのNEVERという奴ら：永遠の命とは言え、仮面ライダーの必殺技に耐える耐久力は持っていないようだ。」

「そんな…じゃあまさかあいつは、大道克己は…これを知っている仲間を囿にしたのか…！」

NEVERの隊長と言うからには、大道もその弱点は知っているはずである。

自分達は二人で組んで戦っており、二対一という状況では敗北する可能性も高くなることは明らかだ。

人類全てに永遠の命を与え、人間が「人」である意味を奪おうとする彼らを決して許しはしないが、それでも仲間との友情ぐらいあると思っていた。

しかし、不利な状況に仲間を送り込み、支援に誰も付けず、本当に自分が退避する時間を稼ぐためだけに囿として使う…

やはり、自分と彼らは同属などではない。根本から全く違うのだ…
ブレイドは強くそう感じた。

「許せない…！仲間を使い捨ての駒として扱いやがって！」

ブレイドは心に燃え滾る怒りを静めることが出来ず、遣されたメモ
リを握り締めた（ブレイクは出来ないため壊れはしないが）。

例え裏切られたとしても最後の最後まで人を信じぬくタイプのブレ
イド（剣崎）に取って、そして同じ永遠の命を持つ者として、大道
の行為は許せなかったのである。

Xはそんなブレイドの姿を落ち着いて見つめ、彼の「人間」性を改
めて確認していた。

その時、二人のライダーの感覚を凄まじい邪悪な気配が襲った。

『！？！』

ブレイドは立ち上がり、Xと共に背後を振り向くと、紫色のスパ
イクが迸り、突如虚空に不気味な眼球に似た「何者か」が出現した。

『仮面ライダー…やはり…貴様らは現れるのか…』

幻のように半透明な眼球は静かに言葉を放つと、ブレイドは身を乗
り出して叫ぶ。

「貴様！何者だ！？」

ブレイドの本能が告げる…

アレはとて邪悪なモノ…生きとし生けるもの者を全て闇に包み込
むモノ…決して放つて置いてはいけないモノ…

アンデッドの本能は、「アレ」は自分の「敵」であると明確に告げ

ていた。

眼球はブレイドに視線を映すと、彼を嘲笑うように再び声を発した。

『フン…人の身を捨て強靱な永遠の命を手に入れたか…脆弱な存在の分際で「創世王」の寿命を凌ぐ命を手にするとは…真に身の程を知らぬ愚者なり…』

「何！？何でそれを…！」

この眼球は自分の事を知っている…それは何故だ？

しかし答えは帰ってこず、次にXライダーが眼球に向けて叫んだ。

「貴様か！？貴様が1号やRXが言っていた「邪眼」か！？」

「邪眼…？」

ブレイドはその単語を耳にし、頭に疑問符を浮かべた。

「邪眼」と呼ばれた眼球は次にXライダーに視線を移し、また言葉を発する。

『貴様は…奴らの仲間か？』

「そつだ！俺は仮面ライダーX！お前の事は先輩と後輩から聞いている！答える！何を企んでいる！」

『…私の願いは未だ変わらず…二つのキングストーン…究極の肉体…そして更に永遠の命を手に入れ、真の「創世王」となること…』

邪眼は再び正面を向き、二人のライダーを視界に移す。

『再び蘇る時は来た…貴様らのその命…残り僅かだと思いが良い…』

そう言い残すと、邪眼はブレイドとXの前から消えた…

恐るべき邪悪な敵の出現に、二人のライダーは脅威的な戦慄を感じ

ずにはいられなかった…

…
邪眼が出現した後、Xとブレイドは変身を解き人間の姿に戻った。
剣崎の肌は先程の攻撃でダメージを受けたせいかわ所々怪我をしており、傷口から緑色の血液が流れている。

この緑の血こそ、剣崎がアンデッド・ジョーカーである何よりの証であった。

剣崎は敬介から眼を背け、気まずそうな表情をしたが、敬介はあまり気にせず剣崎に話しかけた。

「大丈夫か？所々怪我をしているぞ？」

「！？」

剣崎は驚いて敬介の瞳をまっすぐに見つめると、恐る恐る口を開いた。

「気に…ならないんですか…？」

敬介はその瞳から、剣崎がどのような道を歩いてきたのかを悟った。当時GODと戦い始めたばかりの頃、敵の策略で市民に殺されかけた少年を救った際、敬介は暴徒と化した人間の包丁を平手で防いで曲げ折ってしまった。

カイゾーグとなった敬介の肌が、まるで鋼鉄のような硬度を持ってしまっていたからである。

暴れる人々は敬介を見てまるで怪物を見たような顔で逃げ、助けた筈の少年も「お前はロボットだ！ロボットが人間のフリなんかするな！」と敬介を突き放した…

剣崎の瞳は、そんな自分と同じような哀しみの色を秘めていたのである。

むしろ機械の体と違い、どんなことがあってももう二度と朽ちる事の無い永遠の命を持ってしまった剣崎の方が、哀しみの重さだけなら自分達改造人間よりも重いかもしれないと感じた。

だから、これから彼が背負っていく哀しみが少しでも軽くなるようお願いしながら、敬介は優しく、笑顔で答えた。

「確かに緑の血には少し驚いてしまったが、俺も改造人間だ。人ならざる者の哀しみって奴は少しくらい分かっているつもりさ。」

敬介はぽんと音を立て、剣崎の肩に手を置く。

「こんなことを初対面の俺が言っても馴れ馴れしいだけかもしれないが、俺達には失った物があれば、得た物だってある。そうじゃないのか？」

剣崎ははっと思い出した。

この選択が本当に正しかったのか今でも分からないが、剣崎はジョーカーになったことで親友である始の「人の中で生きていきたい」という願いを叶える事が出来た。

そしてこれからどれだけ永い年月が過ぎようとも、始という友人が世界のどこかに居てくれると思うだけで、胸を裂く痛みと孤独に耐えられるのだ。

剣崎はジョーカーになるという選択をしたことで、人としての生や幸福、人間の仲間達との繋がりを失ってしまったが、代わりに文字通りの意味の「永遠の友情」というかけがえの無い宝を手に入れたのである。

敬介は再び剣崎の瞳を見つめ、彼の肩の荷を少しは軽く出来たかと感じると、剣崎の肩から手を降ろし、再び暖かく言葉を発する。

「ほらな。お前にも得た物はあるだろう？きつとそれは何よりもか

けがえの無い宝物になっているはずだ。だからさ…」

それは、敬介を突き放した少年の折れ曲がったフルートを改造人間の腕力で治したあの時、これから「Xライダー」としての運命を受け入れ、正義の為に戦い続ける事を、厳しく自分を愛してくれた亡き父親に誓った時の言葉…

もし助けになるのなら、その言葉をこれから過酷な運命を生き抜いていく後輩にメッセージとして送ろう…

敬介はそう思いながら、そのメッセージを剣崎に伝えた。

「人間じゃないってのも、いいもんさ。」

剣崎の胸に、とても熱い感情がこみ上げる…目頭が少しずつ熱くなる…

だが、涙は流さない。

運命と戦い続け、これからまた新たな戦場に向かう戦士に涙は必要ないのだから…

「ありがとうございます…本当に…ありがとうございます。」

剣崎は流れそうな涙を飲み込み、敬介に頭を下げた。

次に敬介は、これから共に戦う仲間の誓いとして、剣崎に右手を差し出す。

「改めて自己紹介をしよう。俺は…神敬介。」

剣崎は頭を上げると、左手を差し出し、敬介の右手と重ね合わせ、その肌の硬い手を、緑の血が少し付いてまだ乾かぬ指で握った。

「剣崎…一真です!」

二人は固く握手を交わし、NEVERの計画を砕き、共に悪と戦う誓いを立てた。

「よろしく頼むぞ、一真！」

「はい！神先輩！」

これが、「ブレイド・Xの物語」のプロローグの終了…
そして次なる戦いの物語の始まりであった…

3話（後書き）

Xの活躍描写少ないですかね…ライダーソングのフレーズをアレンジした文章を使ってしまったが…大丈夫かな？酷いなら直したほうがいいですかね？

他にも、レイカをヒロインっぽくさせすぎたかな？とか、はっきり言って自己満足な展開だな…とか不安は一杯です。

とりあえずブレイドとXのファンとして書きたいものは書けた…と思っています。

最初は雑魚ドーパントを用意しようかと思いましたが、葦原は剣崎達にネクロオーバーの限界と大道の非道さを伝えるために一人目の怪人として使わせてもらいました。

ヒビキさんの和服姿については劇場版の服装を着て額にヘアバンド（？）を付けてないものと想像していただければ幸いです

今回はブレイド・Xの物語が最後まで続くのか…それとも一旦区切って別のライダーの物語になるのか…お楽しみに。

来週の土曜にちょっと背中を手術しなければならぬので、入院したらしばらく投稿出来なくなるので申し訳ありません。

絶対に死にはしないそうなので未完で終わるなんてオチは無いと思います（笑）

入院前に後1、2話書ければなあ…

4話

仮面ライダーブレイドと仮面ライダーXが共に戦う誓いを立てていたその頃、彼ら二人とはまた別の場所で別の物語が展開していた：四人の仲間達とは別行動を取っていた仮面ライダーアギト・津上翔一は、稼働を停止したはずの廃工場を訪れ、その中を調査していた。その工場は何年も前に廃棄された大規模な施設だったが、最近この中に人気があり、なにやら機械のような物の稼働音まで聞こえたという噂があつたのである。

あくまで最初は噂だったが、好奇心を持って工場に近づいた子供達、この手の噂が好きな若者達、どうにも気になって中に入った大人達等、何人もの人たちが行方不明になってしまったのである。

すぐに警察による調査が開始されたが、その警官達ですら工場に入った後、そこから出て来る事はなかった：

誰も手が付けられなくなり、迷宮入りしかけている廃工場を舞台とした行方不明事件を解決するため、翔一はここを訪れたのである。

翔一は工場のエントランスに入ると、キョロキョロと辺りを見回す人は一人もおらず、電気も点いていないため昏間だというのに少し薄暗い：…なのに自動ドアは動いている…

翔一は顔をしかめ、口を尖らせて文句を口走った。

「うーん…嫌な雰囲気だなあ…本当に何かお化けでもでちゃいそ…!?」

その時、翔一のアギトとしての感覚が強い邪悪な気配を捉え、鈍器による軽い衝撃を受けたように疼いた。

翔一は目を開き、ゆっくりキョロキョロと辺りを見回すと、額を押さえる。

「この感覚は…似てる…「あの時」の…「アイツ」と…」

翔一がその感覚を感じたのは初めてではなかった。

あれは確か七年ほど前…先輩である仮面ライダー達と始めて共闘し、時間を越えて巨悪と戦った「時空攻防戦」の時に感じた邪悪な気配と同じ…

「まさか…また「アイツ」が…！」

翔一はその戦いで目撃した「邪悪な眼」の姿を思い出し、眉間に皺を寄せた。

「とりあえず…前に進もう…」

翔一は少しクラクラする頭を揺すると、施設の先へと足を進ようとした。

しかしその直前、二階の手すりの上から赤い仮面と黒尽くめのスーツを身に付けた二人の男が奇妙な泣き声を出しながら翔一の前に降り立った。

「バダン戦闘員」である。

「お前達は!？」

『アイツ!!』

戦闘員達は二人同時に翔一に向けて襲い掛かる。

翔一は何とか前方に受身を取って二人の間を潜り抜けると、パンチとキックを駆使して戦闘員と戦い始めた。

「ハッ!…ハアッ!」

戦闘員達は中々の耐久性があったものの、やがて翔一に殴り倒され、液体となって消滅する。

二体の戦闘員を倒した翔一は、ほっと息をついて額の汗をぬぐった。

「ふう…こいつらも、組織の戦闘員か…やっぱりここには何かあるんだ…行かないと！」

翔一は改めて、施設の奥へと足を進める。

そして翔一が自動ドアの付近から完全にいなくなった後、黒いジャケットとダークグレーのジーンズを身に付けた男が、自動ドアの向こうからエントランスへと足を踏み入れた…

…

翔一は施設の中を見回りながら、作業場へのルートを探した。

そこに行けば、何が行われているのか分かるかもしれないと踏んだのである。

時に襲い来る戦闘員を倒しながら、翔一は作業場へのルートをかむしやりに歩き回る。

しかし探索の中で、二階の休憩所のような場所に入った翔一は、画鋲で四方を止められ、壁に貼られた施設の全体図を見つけた。

「よし、この地図に従えば…」

翔一は画鋲を外し、地図を剥がすと、大まかに見ながら全体図を少しずつ覚えていく。

ある程度覚えた後、翔一は地図を折りたたんでポケットにしまい、休憩所を出た。

…

作業場は工場と別の場所に建てられており、二階から外に設置され

た鉄製の階段を渡らなければ作業場には迎えない。しかし、二階と階段を繋ぐ扉は鍵が閉まっており、壊せる強度でもなかった為、仕方ないが鍵を探すしか方法はなかった。

「参ったな…一体鍵は何処にあるんだ…？」

翔一は再び一階に降りると、まだ行っていない工場の発電室に向かうことにした。

もしかしたら、そこに職員が以前使っていた鍵が置かれているかもしれない。

戦闘員達の襲撃は途切れなかったものの、翔一は何とかそれを蹴散らしながら発電室へと足を勧めた。

やがて発電室の扉の前に付くと、幸い扉に鍵はかかっておらず、すぐにその中に入る事が出来た。

薄暗い発電室の中はそれなりに広い空間が広がっており、翔一は必死に目を凝らして辺りを探す。

そしてついに、発電室の棚に置かれた鍵らしき物を発見した。

「あつた！鍵だ！」

翔一は表情を明るくし、ポケットに見つけた鍵を仕舞う。しかしその時、突然不気味な雄叫びが響いた。

「ギギイイイイイ！」

「！？」

翔一が慌てて振り向くと、トカゲに似た怪物が出現し、翔一へと跳びかかってきた。

翔一は横に受身をとって攻撃を回避すると、トカゲの怪物は先程まで鍵が置いてあった棚に構えた爪を突っ込んだ。

攻撃を何とか回避した翔一は立ち上がってトカゲの怪人、「トカゲロイド」を睨むと、身構えて叫びながら問いかける。

「お前は…誰だ!？」

「貴様には関係ない!実験のため我々に捕まってもらうぞ!ギイイイイイイ!」

トカゲロイドは再び翔一に襲い掛かると、翔一はジャンプでトカゲロイドの後方に跳び、距離を取る。

そして左手を左腰部に沿え、左斜めに下げた右手の掌を左手の握り拳に重ねると、右手を一気に前に突き出し、次に関節を曲げることで右手を引っ込める。

すると、翔一の腰から金色の光が回転して輝きながら、両腰にスイッチが備え付けられた赤と金に彩られた変身ベルト「オルタリング」が現れた。

それから翔一は右手をゆつくりと突き出しながら前に伸ばすと、声高々に叫ぶ。

「変身!」

そして両腕をクロスし、その後にオルタリングに付いたスイッチを強く両手で叩くと、翔一は金色の輝きと共に仮面ライダーアギト・グランドフォームへと変身を遂げ、「ヒュン!」という力強い音を立てながらファイティングポーズを取った。

トカゲロイドは突然出現したライダーの姿に驚くと、一步後ずさつて動揺をあらわにした。

「仮面ライダー!?!ここを嗅ぎ付けたのか!?!」

「お前達は何者だ!?!何が目的なんだ!?!」

「教えるものか!我々の邪魔はさせん!死ね仮面ライダー!?!」

トカゲロイドは武器の薙刀を手に持つと、乱暴にそれを振り回して構える。

そしてその刃の切っ先をアギトへと向け、獣のような雄叫びを上げて襲い掛かった。

しかし、アギトは冷静に敵の動きを見つめ、深く深呼吸すると、自分に向けて襲い掛かった刃を紙一重で避け、トカゲロイドの腹部にニーキックを叩き込んだ。

「ギギイツ!？」

「ハアツ！」

その隙を逃さず、アギトはトカゲロイドにパンチとキックの連打を素早く叩き込んでいく。

トカゲロイドも負けじと得物である薙刀を振るうが、至近距離で武器が長物であったことが悪かった。

小回りの聞く取り回しが出来ず、攻撃も防御もままならないまま、アギトの徒手空拳を用いた早業の連続攻撃に翻弄され、追い詰められていく。

「ハツ！ハアツ！」

やがてアギトが突き出した右拳がトカゲロイドの腹部にぶち当たり、敵を数メートル先へと殴り飛ばした。

トカゲロイドは硬い地面に叩き付けられたが、すぐに立ち上がりアギトを睨んだ。

「グウ…こうなればこれで焼き殺してくれる！」

トカゲロイドは少し首を伸ばすと、自信のモデルとなった動物であ

るエリマキトカゲの特性を利用するかのように首の襟巻きを展開し、口から凄まじい勢いで火炎放射を放った。しかしアギトは怯むことなく、頭部にそびえる二本の大きな角の両脇から、左右二本ずつのクロスホーンを展開する。

そしてアギトが腰を低くし、深呼吸をしながら身構えると、アギトの足元に巨大な「アギトの紋章」が出現し、エネルギー「オルタフオース」へと変って両足の裏から体全体へと吸い込まれていく…

「はあああああ…！」

アギトはゆっくりと右拳を構え、構えた拳の周囲が陽炎のように揺らめくと、アギトは炎へ向けて全速力で走り、灼熱の中へと突入した。

トカゲロイドはアギトの突然の行為を自滅かと思ったが、アギトはトカゲロイドがはき続ける灼熱の炎の中を物ともせず走り抜けた。そしてトカゲロイドの前に立つと、オルタフオースを集中させた右拳を勢いよく突き出した。

トカゲロイドはとっさに薙刀で防ごうとしたが、アギトのパンチは薙刀の柄を真っ二つに叩き折り、トカゲロイドの腹部へと直撃した。

「ギイイイイイ！！バ…バカな…！？」

トカゲロイドは断末魔の絶叫を上げて数歩後ずさると、爆炎と化して消滅した。

このアギトが放った技こそ、必殺の威力を秘めた「ライダーパンチ」である。

今までの戦いの経験と自分の能力を最大限に生かし、トカゲロイドを倒したアギトは、一息ついて拳を握り締めた。

「やっぱりこの工場には何かがある…何とかしなくちゃ！」

アギトはこの廃工場で行われている「何か」を止めなければならぬと改めて決意すると、発電室を出、再び建物の二階へと向かった。

：

アギトはその力で度々襲い来るバダン戦闘員達を蹴散らしながら二階へと進み、発電室で見つけた鍵で閉ざされていた扉を開けた。

扉の向こうには赤茶色にさび付いた鉄の階段があり、アギトは走りながらそれを上っていく。

その階段でも度々戦闘員が現れてはアギトの行く手を阻んだが、全てアギトの拳や蹴りによって緑色の液体、爆炎へと変えられ、消滅していった。

やがてアギトは作業場と階段を繋ぐ広い鉄の橋の上にも到達すると、作業場の入り口の扉に繋がる下りの階段へと向かおうとした。

しかしそんなアギトの元に、突如上空から羽根型の手裏剣爆弾が跳んできた。

「ハッ!?」

アギトは咄嗟に前転してそれを回避し、上空を見ると、そこにはタカの姿をした怪人が翼をはためかせながらアギトを見下ろしていた。タカの怪人「タカロイド」は、アギトの前に着地すると、鋭い爪が付いた両腕を構えて鳴き声を上げた。

「クエエエエエエエ！これ以上はいかせんぞライダー！死ねえ！」

タカロイドは俊足でアギトに迫り、両腕の爪を振るってアギトに攻撃を仕掛ける。

アギトはそれを回避し、攻撃を仕掛けようとしたが、タカロイドはアギトのパンチを飛翔して避けてしまい、そのまま滞空してしまっ

げると、タカロイドをすれ違いざまにストームハルバードの刃で切り裂いた。

「クエエエエエエエ！？」

切り裂かれたタカロイドは空中で何度も旋回した後、大きな爆炎となつて消滅すると、アギトは鉄の階段の上に着地し、ストームフォームからグランドフォームへと戻った。

「二度も一気に怪人が攻めてくるなんて…一体ここで何が行われているって言うんだ…？」

進入したばかりにもかかわらず、二体の怪人によつて襲撃を受けたアギト…

怪人達を退けることは出来たものの、一体怪人達に守られたこの廃工場で何が行われているのか？さらわれた人間達はどうなってしまったのか？

そして、アギト・翔一が知っているという邪悪な気配とは？

謎は、まだ暗黒の闇の中である…

4話（後書き）

えらく短いですが、手術前ということでお見逃しください…

ブレイド編を続けるということも考えたのですが、正義の系譜の長所はやはりライダーを変えながら物語が進むということだったので、アギト編へとシフトさせました。

しかし、ゲームでキーアイテムを手に入れ、戦闘員を倒しながら進む描写を描くことのなんと難しいか…

ああいうゲームのノベライズって大変なんだろうな…

ブレイド同様、二話でアギトと協力する昭和ライダーを登場させます。

ヒントは、正義の系譜でアギトと共に戦ったライダーの一人です。お楽しみに。

5話

タカロイドを倒したアギトは、作業場の入り口のドアへと辿り着き、ドアノブをまわして開いた。

鉄が擦れる様な音を立ててドアが開くと、アギトは薄暗いその部屋へと入り、息を押し殺しながら真っ赤な目で周囲を見回す。

部屋には大きなベルトコンベアが設置されて稼動しており、大きな木箱がいくつも積み重なって置かれていた。

そしてその一角で、ベルトコンベアから運ばれてきた不気味な液体が入ったケースを木箱の中へと詰めている戦闘員の集団を発見した。

「待て！」

「イイ！？」

アギトはダツシユで戦闘員達に接近し、徒手空拳を駆使して瞬時に敵を全滅させると、残されていた木箱の中を確認した。

「何だこれは…？」

木箱の中には、直径40？程の特殊ガラスケースに納められたオレンジ色のドロドロした物体が、いくつも収納されていた。

よく見ると、オレンジの液体は細かに微動しており、まるで生きているかのような印象を受ける。

おそらく他の木箱の中身も、これと同じケースに入ったオレンジの液体だろう。

とりあえずほかに何かヒントになるものはないかと、アギトは周囲を散策した。

やがてアギトは、ベルトコンベアのコントローラーの傍にファイルと鍵が置かれているのを発見した。

アギトは鍵を拾うと、次にファイルを開いて目を通す。
ファイルのページには、パソコンで打たれた文字でこう書かれていた…

「ここから離れた孤島に建てられた施設よりスーパーエクスピツカの光が放たれ、世界中の人間がネクロオーバーと化した後、我々は「ナノマシンビールス」を世界中に放射する。

「ナノマシンビールス」とは、細菌サイズで作られた改造人間製作用の超小型機械で、これを体内に取り込んだ人間は体の内側からUFOサイボーグへと改造される。

本来大抵の人間が負荷に耐え切れず死んでしまうが、ネクロオーバーとなることによって人間はその負荷に耐えることが出来るようになる。

同時にネクロオーバーの弱点である耐久力も、UFOサイボーグとなることによって大幅に強化、もしくは改善されることだろう。

そしてナノマシンビールスが行う強力な脳改造処置によって、我々は不死身の怪人軍団を手に入れることが出来るのだ。

もし「NEVER」の計画が失敗した場合は、ビールスの散布だけを行い、限られた人間だけを怪人化して我らの同士とする。

そのためにもどのような人間がビールスの負荷に耐えられるのかを調べるため、より多くの人間を捕らえて実験を行う。

実験が成功した後、ビールスはこのアジトより30km離れた山の頂上に作られたビールス散布施設へと運ばれ、そこで世界中にビールスが放たれる。

我々をよみがえらせてくれた「あのお方」への忠義を示すため、我々一同粉骨砕身健闘しようではないか。」

…以上が、ファイルに書かれていた内容である。

「これが…あいつらの計画…!」

アギトはファイルを読み終わると、拳を握り締め、怒りを感じながら呟いた。

つまり敵は、ウィルスサイズのロボットを世界中に散布することで人々を怪人軍団にし、自分達の兵士にしようとしているのだ。

「ネクロオーバー」、「NEVER」、「スーパーエクスピッカー」、「散布施設」など分からないものもあつたが、「ここから離れた孤島」と「30km離れた山」という二つの場所には心当たりがある。

孤島は剣崎、山はヒビキがそれぞれ向かった場所だ。

「剣崎君…ヒビキさん…無事でいてくれ…！」

今更引き返すことの出来ないアギトは、仲間達の無事を祈った…

「本来ならば敵の計画を阻止してくれる事を願うのでは？」という意見もあるだろうが、それは絶対に仲間たちならやってくれと、アギトはとうに確信している。

アギトの願いには、「仲間達が悪の計画を阻止し、無事に帰ってきて欲しい」という意味が含まれているのだ。

そして自分も仲間達の期待に応える為、ここで計画されている陰謀を阻止しなければならぬ。

アギトは早速、作業場内の搜索を再開した。

…
やがてアギトはベルトコンベアの搬入口の傍で新しい扉を発見し、それを開けて次の戦場へと足を進める。

扉の先には長い廊下が続いており、アギトはその先へと向けて走った。

途中何度も曲がり角を曲がり、階段を上り、下り、襲い来る沢山の戦闘員を蹴散らしながら、アギトは進んだ。

その最奥で、アギトは鍵のかかった銀色の真新しい扉を発見した。早速先程拾った鍵を鍵穴にはめてみると、ぴつたりと当てはまり、アギトは扉の施錠を解く。

そしてドアノブを掴み、ゆっくりと回すと、重い扉を開けた…

…

扉の向こうに広がっていた部屋には、ナノマシンビールの液体が大量に入った巨大な培養カプセルと、カプセルからビールスを抽出し、ケースに納めるための大掛かりな機械があった。

機械はかなり丈夫に作られていて破壊することは見た限りでは難しく、カプセルにいたってはバリアによって守られていた。

そしてバリアに守られたカプセルの前には、まるで三葉虫のような形を模った金色の鎧を身に纏った中年の男の姿があった。

「よくここまで来たな、仮面ライダー！」

男は右手に持った鞭を構え、アギトに向かって叫んだ。

「お前は!？」

アギトはその男の姿を目にしたとき、一歩前に身を乗り出して驚いた。

その男は、かつて自分が時空攻防戦で戦った大幹部と同じ姿をしていたのだ。

「地獄大使！お前なのか!？」

その幹部の名は地獄大使…

しかし、目の前にいる金色の鎧の男はそれを聞くと舌打ちをし、嫌悪感をあらわにした。

「地獄大使だと？あんな奴と一緒にするな！」

男は床を鞭で叩き、地獄大使の名を否定した。

そして、自らの名を自らの言葉でアギトへと教えた。

「ワシの名は…暗闇大使！」

暗闇大使：地獄大使の従兄弟に当たる男であり、仮面ライダーZ Xが戦った悪の秘密結社「バダン」の大幹部であった。

そしてこの男こそ、現在計画されている「ナノマシーンビルス計画」の作戦指揮官なのである。

「暗闇大使…！」

アギトは、目の前にいる大幹部の名を呟いた。

目の前にいる奴こそが、今回の自分が倒すべき相手なのである。

未知の敵が放つ異様なオーラに、アギトは戦慄を感じずにはいられなかった。

「仮面ライダーアギト！貴様にこの計画を邪魔されては困る！「最も適した怪人」で、貴様を始末してくれるわ！」

暗闇大使はそう言って再び床を鞭で叩くと、暗闇大使の背後から二つの光が現れ、彼の前に移動すると、アリとカマキリの怪物の形へと変化した。

光が変化したのはクイーンアントロードとマンティスロード…以前アギトが戦っていた神に仕える怪人軍団「アンノウン」のロード怪人の二体であった。

「アンノウン！？そんな！なんでアンノウンが！？」

アギトは悪の組織の大幹部に神の使いであるアンノウンが従うという奇妙な光景に驚愕した。

暗闇大使はその様子を見ると、ニヤリと笑って口を開いた。

「ハツハツハ！我々をよみがえらせてくれた「あのお方」にとつてすれば、例え神の使いといえど、再び命を与えて駒にするなど容易い事なのだ！貴様はその二体に敗れ死ぬがいい！」

暗闇大使の叫びと共に、二体のロード怪人はじわじわとアギトに迫る…

アギトは二体一という不利な状況に息を呑みながら、なるべく動揺を見せずにファイティングポーズを取った。

その時…

「ハツハツハツハツハ！！」

まるで悪の愚行を笑い飛ばすかのような笑い声が、室内へと響いた。

「ムツ！誰だ！？姿を見せろ！」

暗闇大使は部屋中を見回し、二体のロード怪人も足を止めて暗闇大使と同じ行動を取る。

「俺はここだ暗闇大使！」

すると、先程アギトが入ってきた扉が突然開き、黒いジャケットとダークグレーのジーンズを身に付けた六十代中盤ぐらいの年齢の男の姿があった。

「」の声…！」

アギトはその男の声に聞き覚えがあり、暗闇大使もまた男の姿をみると、動揺しながら左手のアイアンクローで男を指差した。

「き、貴様は…本郷猛！」

本郷猛：そう呼ばれた男は、左手を斜め四十五度に突き出し、ゆっくりと反時計回りに腕を動かす…

「ライダー…変身！」

そしてその掛け声と共に、左手を引っ込め、入れ替わりに右手を斜め四十五度に突き出す。

それと同時に男の腰に赤いベルトが現れ、銀色のバックルの中心に備え付けられた風車ダイナモが激しく回転し始めた。

「トオツ！」

最後に宙へとジャンプすると、ベルトから凄まじいエネルギーが放たれて輝き、本郷を「変身」させた。

そして、銀色の手袋とブーツ、両手両足を流れる二本のライン、真紅のマフラーと緑の仮面が特徴的なバツタの戦士が床の上に着地した。

本郷猛：またの名を仮面ライダー1号

別名「技の1号」と呼ばれ、多くの悪に恐れられた伝説の戦士であり、一番最初に誕生した「始まり」の仮面ライダーであった。

5話（後書き）

復帰一回目です。

アギトと共に戦うライダーとしてはやはり正義の系譜で共演し、劇場版でも俳優同士が共演した1号ライダーを選びました。

ナノマシンビルスの元ネタはお気づきの方も多いと思いますがTHE NEXTのナノロボットです。

なお、暗闇大使の潮健児さんの代役のイメージはやはり大杉漣さんにしていただければ幸いです。

次回でアギト編も一旦区切りとなります。

しかしこの廃工場の設計が色々とおかしい気がする…

今回は正義の系譜をプレイするイメージをより強くして書いてみたつもりです。

本当にこれが凄く難しい…早く上達せねばと心から思います。

それではまた…

6話

仮面ライダー1号！世界をショッカー、ゲルショッカーから守った勇者・本郷猛が変身するバツタの改造人間であり、世界で最初に誕生した仮面ライダーである！

48個の多彩な技を持つことから「技の1号」と呼ばれ、多くの悪に恐れられてきた伝説の戦士が、今再び仲間の危機に駆けつけた！1号はアギトに歩み寄ると、嬉しさを含めた口調で言葉を発した。

「久しぶりだな、アギト！」

「ライダー1号！来てくれたんですね！」

アギトは突然駆けつけた先輩ライダーの姿に驚きつつも、久々のちやんとした再会を喜んだ。

1号とアギト…戦った時代の違う二人が何故ここまで親しく会話しているのか？

実はこの二人は、1971年、1973年、1986年、2004年の四つの時代で展開された時空攻防戦を共に戦った仮面ライダーなのである。

そして、決戦の際にはバラバラの時代を超えて他のライダーと共に集結し、巨悪と戦った。

他にも大ショッカーとの決戦や三ヶ月前のショッカーとの戦いでも同じ場所で共に戦ったが、直接会話したのは時空攻防戦以来は今回が久しぶりである。

「俺も、巨大な悪の気配を察知してここに来たんだ。アギト！俺も再び君と共に戦うぞ！」

「ありがとうございます先輩！とても頼もしいです！」

アギトと1号は硬い握手を交わし、強い信頼をお互いに示した。この二人も仮面ライダー…相互理解に長い時間は必要ない。

暗闇大使はそんな二人のライダーの様子を見て地団駄を踏むと、再び床を鞭で叩いた。

「おのれえ！忌々しいライダー共め！クイーンアントロード！マンティスロード！奴らを血祭りに上げてしまえ！」

『ウオオオオオオ！！』

暗闇大使の命令を受けた二体のアンノウンは、それぞれの武器を構えて二人のライダーに襲い掛かる。

対する1号とアギトは握手を解き、相手に向けてファイティングポーズを取った。

「アギト！俺はアリの怪人をやる！お前はカマキリの怪人を倒すんだ！」

「はい！」

アギトは1号の提案を快く受け入れると、「ダブルライダー」はそれぞれの敵へと向けて勇敢に挑んでいった。

「トオツ！トオツ！トオオオオオオオ！！」

1号はクイーンアントロードが振るう刃付きの杓杖を用いた攻撃を避けながら、素早く、そして鋭い拳と蹴りを敵へと叩き込んでいく。その動きは年季が入っていたが、その磨きぬかれた鮮やかさな攻撃はクイーンの名を冠するアンノウンですら寄せ付けずに圧倒していく。

1号は改造人間として旧型ではあるが、潜り抜けてきた修羅場と繰り返された特訓…そして40年という長い歳月を生きてきた彼は進

化を続け、今なお屈強な戦士として戦い続けている。
その力は、若々しい戦士にも全く遅れを取らなかった。
嵐と共にやってくる光の男・仮面ライダー1号は、この世界に悪のある限り、その陰謀を暴き、闇を蹴散らし、そして悪の怪人を切り裂くのである。

「ハッ！ハア！ハアッ！！」

アギトもまた、シンプルではあるが無駄の無い体術を駆使してマンティスロードの持つ鎌を避けながらパンチャキックを相手に浴びせていく。

彼の戦い方には、戦闘時に無我の境地へと入り、敵の出方を落ち着けた戦闘スタイルで読みきつて有利に戦うという特徴がある。

普段は陽気だが、戦っている時には神経を研ぎ澄まし、落ち着いた態度で戦うことの出来るアギトだから出きる芸当である。

そして今回は1号が駆けつけてくれたという安心感がよりアギトの戦い方の安定性を高めていた。

仮面ライダーアギトは全ての人々がそれぞれ持つ居場所を守るため、平和を脅かす悪と戦うのである。

二人のライダーの戦いを見ていた暗闇大使は奥歯をかみ締め、眉間に皺を寄せていた。

地獄の底から蘇り、新たな計画を打ち立てたというのに、また仮面ライダーが自分の邪魔をしに現れた。

暗闇にとってこれほど忌々しいことは無かったのである。

「おのれ仮面ライダー共め！何処までもワシの邪魔を…！」

以前計画していた時空破断装置による世界征服計画も、仮面ライダー達の手によって阻止された。

そして今再び、仮面ライダー達は自分の計画を阻もうとしている。自分を蘇らせてくれた「あのお方」の為にも、もう失敗は出来ないというのに…

「トオツ！」

「ハアツ！」

やがてマンティスロードとクイーンアントロードはそれぞれアギトと1号に蹴り飛ばされ、床の上へと叩きつけられた。

1号とアギトはトドメを刺す好機と見ると、お互い顔を見合わせる。

「アギト！行くぞ！」

「はい！」

1号は右手を斜め45度に突き出し、アギトは腰を低くして右手を前に突き出す。

アギトの四本のクロスホーンが展開し、足元には大きなアギトの紋章が現れると、紋章はゆっくりとアギトの両足にエネルギーとなって吸い込まれていく…

そして二人のライダーは一気に空中へとジャンプした。

1号は空中で体を一回転させ、その体に強力な風のエネルギーを宿すと、フライングキックの体勢をとり、凄まじい勢いでクイーンアントロードへと急降下した。

「ライダーーーーーッ！キーーーーーック！！」

「ライダーキック」…全ての仮面ライダー達の必殺技の原点であり、数多くの怪人達を屠ってきた最強の必殺技…

仮面ライダー1号の放つ伝説のライダーキックは、クイーンアント

ロードの胸部へと直撃した。

「ハアアアアアアアッ!!!」

アギトもまた空中でキックポーズを取り、自らの必殺技である「ライダーキック」を放つ。

とてもシンプルな技ではあるが、凄まじい破壊力と数多くのアンノウンを倒してきた実績を持つアギトのライダーキック…

アギトが放つ新世代のライダーキックもまた1号に勝るとも劣らない威力を持ち、マンティスロードの胸部へと突き刺さる。

『グギャアアアアアア!!!』

二人のライダーキックをそれぞれ受けたマンティスロードとクインアントロードは、頭上に天使の輪に似た光を浮かび上げらせ、粉々に爆発した。

旧世代と新世代：二人のライダーが協力すれば強い怪人となんの障害でもないのである。

怪人達を倒した1号とアギトは、次に暗闇大使の方を睨んだ。

1号は暗闇大使を指差し、叫ぶ。

「暗闇大使！次は貴様の番だ！」

暗闇大使は舌打ちをすると、悔しげな口調で言い返した。

「仮面ライダー共め！これでワシに勝ったと思うなよ！貴様らにはこの計画を止める事など出来わせんだ！」

暗闇は捨て台詞を残すと、背後の扉を潜って逃げて行った。

1号とアギトは一先ず暗闇を見逃すと、変身を解除し、それぞれ本

郷猛、津上翔一の姿に戻った。

本郷は翔一の顔を見ると、穏やかな笑みを見せる。

「こうして、君と「本来の姿」で会うのは初めてだな。」

「本来の姿」…人間の姿を「本来の姿」と呼ぶなど、改造人間にとつてはあるまじき行為かもしれない。

しかし、本郷は40年経った今でも、自分は「人」でありたいと思っていた。

翔一もそれは分かっていたので、笑顔で本郷に答える。

「ええ、俺達、また会えました！」

翔一は嬉しかった。

時空攻防戦の際、1号は別れの際に「いつかまた必ず会える」と言った。

アギト以外の三人は後のクライシス帝国との戦いで再会できたが、アギトにはその機会がなかった。

大シヨツカーやシヨツカーとの戦いでも、ゆつくりと話す時間は無かった。

だからこれが、二人にとっては久しぶりの再会なのである。しかしいつまでも笑っていられない…

翔一は廃工場の入り口で、時空攻防戦の時に感じたあの時と同じ気配の事を本郷に話した。

「俺、工場の入り口であの時の「アイツ」と同じ気配を感じたんです…」

「うむ…君もか…」

本郷は眉間に皺を寄せ、そう答えた。

「貴方も感じたんですか？」

「ああ。俺も怪しい動きを察知して仲間達と共に調査していたんだが、「奴」と同じ気配を途中で何度か感じたよ。」

「ということはやはり…」

「間違いない。「邪眼」だ。」

邪眼…

それは時空攻防戦で蠢いていた悪の使者達を操っていた存在…

太古の昔、闇の支配者・創世王の候補であった世紀王であった…

特殊な時間軸を利用して培養した完全な肉体を手に入れ、二つのキングストーンを手に入れて創世王になる事をもくろんでいたが、四人の仮面ライダーの活躍によってその野望は露と消え、滅びた…

本郷の話が正しければ、その邪眼が再び蘇ったということである。

「でも、なんで邪眼が？」

「原因があるとすれば…おそらくライダー大戦だろう。」

「ライダー大戦…どういうことですか？」

「仮面ライダー達の世界は、ライダー大戦で一度ディケイドが命を落とした際に全て蘇った。その再生の中に、邪眼の存在も含まれてしまったんだろう。」

「そんな…」

翔一は肩を落とした。

折角全ての世界が蘇ったのに、邪眼まで生き返ってしまったのでは本末転倒も良い所だ。

下手をすればまたライダー大戦や三ヶ月前のショッカーとの戦いの様に世界崩壊の危機に逆戻りである。

本郷は落胆する翔一の肩に手を置き、彼を元氣付けた。

「弱音を吐くんじやない。俺達も君達に全力で力を貸そう。」
「え？「俺達」？」

本郷は翔一の肩から手を離すと、再び微笑んだ。

「そうだ。俺の仲間達も、君の仲間たちの所にそれぞれ向かってい
る。その中には、あの時俺達と共に戦った仲間も一緒だ。俺達は
一緒に戦って、もう一度邪眼の野望を砕こうじゃないか！」

翔一は強い頼もしさを本郷の言葉から感じ、微笑を浮かべた。
多くの先輩達が、自分達に手を貸すために集っている…
これ以上に頼もしい存在は、翔一には心当たりが無かった。
本郷は翔一に右手を差し出すと、再び口を開く。

「俺は本郷猛だ。よろしく頼む。」

翔一も左手を差し出し、本郷の握手に応じた。

「津上翔一です！本郷先輩、よろしくお願いします！」

この場所でも、新世代と旧世代の仮面ライダーが手を結んだ。
アギトと1号の物語もまたプロローグが終了し、新たな物語へと進
むのである…

6話（後書き）

剣・X編に比べるとドラマパートは少ないです…すみません。

アギト・1号編は単純構造な王道路線で行きたいと思います。

他のライダーの物語は…何とか差別化したいです。

しかし最近またパソコンの調子が悪い…修理に出すまでいつまで書けるのか…

次は響鬼編プロローグ行きます。

7話

人間の生命エネルギー・ライフエナジーを糧として吸収する怪物・「ファンガイア」の中でも上位の存在に位置する4体、チエックメイトフォーの頂点に立つ男であり、ファンガイアの王…「キング」の意識は、漆黒の闇の中を漂っていた。

意識が闇の中にある理由は、このキングという男がすでに死んでいくからである。

キングは、ファンガイアに敵対する種族を次々に滅ぼし、ファンガイアの為に自らの誇りを掲げ、ファンガイアの為に同族達を厳しい掟で支配してきた正に支配者たる男であった。

数多くのファンガイア達が彼を敬い、慕い、恐れた…

キングは永い間同族達を自分が持つ圧倒的な力で掌握し、最強の一族へと導いてきたのである。

しかし、そんなキングが歩んできた覇道の物語にも思わぬ躓きが生じることとなる…

人間を愛してしまったファンガイアを掟を破った者として処刑するチエックメイトフォーのメンバーであり、種族の契約によって結ばれたキングの妻、ファンガイアの女王、「クイーン」である女性・真夜が、紅音也という人間の男と恋に落ちてしまったのである。

キングはすぐにこの男を殺し、真夜を自分の手に取り戻さなければならぬと考えた。

しかし、それは真夜を愛していたからではなかった…

クイーンがキングの元を去るということが、ファンガイアという種族の名に泥を塗り、キングの誇りに傷をつけるものであったからである。

自分と種族のプライドのみを考慮した非情な答え…

だが考えようによってはそれはただの建前であり、キングは本当は真夜を愛していたのかもしれない。

掟だけがすべてだというのであれば、クイーンの力を真夜から奪った時点で次のクイーンの誕生を待てばいいだけの話だからである。しかし、キングは力を失ってなお真夜を求めた。

それはキングが無意識のうちに真夜を愛していたからなのかかもしれない。

だが、キングは自らの闇の鎧・ダークキバを奪った音也と、未来から訪れた音也と真夜の息子である紅渡・仮面ライダーキバの二人の活躍によって敗れ去った…

しかし、死して直キングの意思は途絶えることなく、真夜へとその妄執のような思いをさせていた…

『真夜…真夜…』

キングは、紅親子に敗れた時…そして家臣であったチエツクメイトフォーの一人・ビショップに意思の無い状態で蘇らせられ、自分と真夜の実の息子であった登大牙と渡の義兄弟に倒された時とで2回死んでいる。

しかし、2度死んでも真夜への執着は消えなかった。

誇りと契約によるものなのか、それとも愛によるもののかは分からないが、それはキングの真夜への思いを強く現していた。

そんな闇の中で真夜を思い続けるキングの元に、邪悪なる眼…邪眼が降臨した。

『我の声を聞け…吸血鬼の王よ…』

『誰だ…俺を呼ぶのは誰だ…？』

『お前が取り戻そうとしたもの…もう一度手に入れる機会を我が与えよう。』

『何だと？』

キングは閉じていた瞼をゆっくりと開くと、その眼前に紫色に輝く

不気味な眼が出現する。

そして次の瞬間、キングの目の前に失ったはずの闇のキバの鎧の中枢部・「キバットバット?世」と、妖剣「ザンバットソード」が出現した。

「これは…」

「お前が失った鎧と剣を、蘇った我の力で模造した物だ…だが模造品とはいえ、力は本物と変わらぬ。」

キングはキバットバット?世とザンバットソードをその手に取ると、再び邪現に視線を合わせ、口を開いた。

「本当に…貴様は俺にもう一度真夜を取り戻す機会をくれるのか…?」

「与えよう…だが、代償として我に力を貸してもらおうぞ…」

これが…ファンガイアの王・キングと、暗黒の元世紀王・邪眼…

二人の悪の支配者が契約した瞬間であった…

…

仮面ライダー1号と仮面ライダーアギトが再開していたその頃、仮面ライダー響鬼ことヒビキ（本名・日高仁志）は、二人の戦闘員と戦いを繰り広げていた。

戦闘員の種類は、ゲルシヨッカーの次に出現した悪の秘密結社・デストロンの戦闘員である。

幼馴染の滝澤みどりが開発した鬼に変身しても衣服を失わない特殊仕様の時代劇風の衣装を身にまとったヒビキは、その鍛え抜かれた逞しい肉体を鮮やかに扱いながら、二人の戦闘員を簡単に圧倒していた。

「トアッ！」

『イーーーーー！？』

ヒビキが放った回し蹴りを受けた二人の戦闘員は、爆発して火の粉となって消滅した。

ヒビキは一息付くと、額の汗をぬぐって後頭部を搔いた。

「ふう…これで何体目なんだ？」

ヒビキが倒した戦闘員はこれで初めてではなかった。

複雑な山道を長い時間歩きながら、自分の前に現れる何人ものデストロン戦闘員を倒し、ここまで来たのである。

ヒビキにとって戦闘員など敵ではなかったが、物量を武器に襲い来る戦闘員たちの攻撃はいささか鬱陶しかった。

「この山であいつらが何かしてるってのは分かったけど、これじゃキリがないな…」

ヒビキは未だ終わりの見えない山道にため息をつく。

その時、ヒビキの目の前に突如不気味な歪みが生じ、次の瞬間にはまるで神父のような黒尽くめの服を着た眼鏡をした男が現れた。

「貴方が仮面ライダー響鬼ですか…」

「！？」

男が口を開くと、ヒビキは後ずさって目を大きく開いた。

それは突然怪しい男が現れたからだけではない。

その男の姿が、自分の世界を脅かしている怪物・まかもう魔化魍の親を務める怪人の一体・怪童子の人間体に似ていたからである。

「お前：魔化魍の童子か？」

「フツ…違いますよ。私の名はビショップ…ファンガイアの中でも上位に君臨するチェックメイトフォーの一人です。」

ビショップという男は早口で説明すると、ヒビキは眉を潜めて身構えた。

「ファンガイアってのは確か「キバの世界」の怪人か…どっちみち俺にとっちゃ敵だな。あんたらはここでどんな悪いことを企んでるんだい？」

ヒビキはあくまで飄々とした口調で言ったが、眼光は鋭かった。ビショップはそれを見てほくそ笑むと、再び口を開く。

「それはこの山の頂上までくればわかりますよ…まあ、たどり着ければ…の話にはなりますが。」

ビショップはそう言うと、瞬時に姿を消した。そして、周囲に再び彼の声がこだまする。

「異世界の仮面ライダーの力…どれ程のものか楽しみにさせていたできますよ。では、機会があったらまた会いましょう…」

それを最後に、ビショップの声も聞こえなくなった。

ヒビキはファイティングポーズを解くと、うつむいて唇をかむ。

「どつやら、明日夢や京介達に土産を買う時間もなさそうだな…それじゃ、ろくでもないことになる前に悪者退治の続きと行きますか！」

ヒビキは気合を入れなおすと、再び複雑な山道を歩き始めた。そしてヒビキが通り過ぎた後に、青いシャツの上に白いジャケットを羽織り、ジャケットと同じ色合いの白いズボンを履いた男が山道を通った…

…
ヒビキはそれからも襲い来る戦闘員をその鍛え抜かれた体術で蹴散らしながら先へ進んでいた。

正直どれだけ複雑とはいえ、ヒビキが山道で戸惑うことはなかった。ヒビキは鬼という仕事柄、こういう山に入ることが多い。

なのでこういつた山で活動することは得意なのである。戦闘員の相手と道の複雑さで時間はかなりかかったが、着実に頂上へと進んでいた。

むしろ機械による電子ロック等がなかったので、機械音痴なヒビキは楽に先へと進めたのである。

「さて、結構進んだかな？」

ヒビキは直感で、自分が頂上になりに近づいたと正確に予想した。あと少し進めば、頂上にたどり着けるだろう。

しかし、突然気色悪い物音がヒビキの背後で蠢き、丸型の電動ノコギリの刃が轟音を立てながら彼を襲った。

「!?!」

ヒビキはとっさに受け身を取ってそれをかわし、自分に刃を向けてきた相手に視線を移す。

そこには、右手が電動ノコギリとなったトカゲの怪人の姿があった。デストロンが作り上げたノコギリとトカゲの合成怪人・ノコギリトカゲである。

「これ以上は行かせないわ…ここで死になさい！」

女性怪人であるノコギリトカゲは、電動ノコギリを再び構えて、ヒビキへと襲い掛かる。

ヒビキはその攻撃を避けながら距離を取ると、飄々とした顔つきでノコギリトカゲを睨んだ。

「女怪人か…でも、ノコギリなんて危ないもん振り回す女は好みじゃないな…」

ヒビキは冗談を言うように言うと、自らの変身アイテムである鬼の顔を象った金色の音叉、変身音叉・音角を取り出し、角型の音叉を伸ばす。

そして音叉を指で弾くと、清らかな音色が周囲に響き渡る…

ヒビキはそれを額にかざすと、額に鬼の顔が現れ、体が赤く染まる。そして瞬時に紫色の炎が体から燃え上がり、ヒビキの体が炎の中でより屈強な体へと変化していく…

「はあああああ…セヤアツ…！」

最後に勢いよく右手を振るうと、炎が吹き飛んで消え去り、体中に特殊な光沢が輝く紫色の戦士が現れた。

この戦士こそ仮面ライダー響鬼…ヒビキの鬼戦士、すなわち仮面ライダーとしての姿である。

響鬼は腰に巻いたベルトの背部に収められた二本の太鼓のバチ…二刀一対の武器である音撃棒・烈火を両手に握り、ベルトの留め具から外すと、それを構えた。

「さて…行きますか！」

響鬼は軽快な一言と共に、ノコギリトカゲへと挑んでいった。

「ハッ！セヤアー！ー！！」

響鬼の華麗な二本の武器捌きは、鮮やかな動きでノコギリトカゲを攻めたてていく。

響鬼は15歳という若年のころから鬼として戦っていたため、もうこの道を初めて10年以上もの年月を戦い続けている。

鍛え抜かれた肉体と技は、悪の組織が作り上げた強力な怪人すらものともせずに攻め立てていく。

「おのれえ…仮面ライダー！」

ノコギリトカゲは自分の攻撃が全く効かないことに苛立ち、動きが雑になってきた。

響鬼はそれを見逃さず、二本の音撃棒で敵を突き飛ばす。

「ギヤアアアアアア！！」

突き飛ばされたノコギリトカゲは地面の上を転がり、よろよると立ちあがると、響鬼はすかさずベルトのバックル部、音撃鼓・火炎鼓を取り外し、ノコギリトカゲに取り付けた。

音撃鼓は巨大化して敵を拘束すると、響鬼は音撃棒を構え、叫ぶ。

「音撃打・火炎連打の型あ！！」

響鬼は自らの技名を叫ぶとともに、二本のバチで強く、太鼓を叩き鳴らした。

「ハツ！ハアツ！ハアアアアア…ハア！！」

その音色は力強いリズムを奏でながら、ドン！ドン！ドン！と邪悪を浄化する「清めの音」をノコギリトカゲへと叩き込んでいく。

本来は魔化魍に使われる必殺技だが、悪の怪人を倒すのにもこの技は十分な威力を持っていた。

どんなに悪の形が違ってても、清めの音が闇を打ち消す正義の音撃に代わりはないということである。

「ハアアアアア…セイヤアアアアアアアアツ！！」

やがて響鬼は、強烈な一振りを太鼓を通してノコギリトカゲに叩き込んだ。

その一撃が決め手となり、ノコギリトカゲの体中から火花が上がる。

「グアアアアアアア！…そんな馬鹿なああああ！！」

ノコギリトカゲはじりじりと後ずさりながら断末魔の絶叫をあげると、大きな爆炎とがして消滅した。

響鬼は爆発とともに戻ってきた火炎鼓をキャッチすると、再びバツクルに装着する。

「とうとう怪人まで出てきたか…ここからは少しの間鬼の姿で行動するかな！」

響鬼はそういつて二本の音撃棒を手に、先へと進んでいった。

…

それからさらに戦闘員達の襲撃は続いたものの、響鬼は音撃棒でそれを蹴散らしながら先を進んだ。

そしてついに、山の頂上へと到達する。
そこには、屈強な造りの大きな施設があった。

「これは…」

その施設の外装は新しく、こんな人気のない山奥に建てられるにしてはいささか不自然であった。

きつとこれが悪の企みを行うための施設なのであるうことは、建物の造りとビショップの話から推測すれば明らかであった。

「ここが悪のアジトって奴か…それじゃ、いつちよ行きますか！」

響鬼は陽気に言うと、施設の中へと入っていく…

その先にどんな恐ろしい敵が待ち受けているかもまだ知らずに…

7話（後書き）

短いですが久しぶりに投稿できました：

今回の敵幹部の一人はキバの中で最大の被害者と言われた過去のキングこと愛称・過去キンさんです。

可哀そうな人のまま終わってしまった過去キンさんを悪役ヘ+ザンバ使うダキバが描きたかった

ので敵役に彼を選択しました。

ビシヨップの中の人ネタはあまりやりたくなかったのですがヒビキさんなら反応してくれると思いましたので。

遅れましたがヒビキさんを主役の一人に選択した理由は、ヒビキ役の細川さんは何かの雑誌でデイケイドの時自分が呼ばれなかったことを悔しがっていましたので、もし正式に呼ばれたら有名でも出てくれるだろうと思ったので選びました。

実を言うとヒビキさんの服については何も説明せずに大丈夫という形を取りたかったのですが、ただでさえ色々強引な本作ですのでそれぐらいは設定守りました。

ゴークイジャー見るたび思うんですがどうしてデイケイドはスカイのように出れる人だけである方式を取らなかったのかわからない…

8話

人の近寄らぬ山奥に建造された施設の一室に、洋風な造りとコーディネートネイトをされた部屋があった。

入口の大きな扉から部屋の最奥にかけては真っ直ぐに血のような真っ赤な色をしたカーペットがしかれ、その赤い道の突き当りには大きな金色の玉座が佇んでいた。

その玉座に、蘇ったファンガイアの王・キングは腰かけていた。

玉座の傍らに妖剣・ザンバットソードを突き刺し、毅然とした面持ちで玉座に腰掛けるキングの姿は、正に「吸血鬼の王」に相応しい偉大さと恐ろしさを際立たせていた。

そんなキングが座る玉座の前ではビショップが跪き、静かに口を開く。

「キング…ドクトルGがお見えになりました。」

「通せ。」

キングの命令と共にビショップは立ち上がると、背後にある洋室の大きな扉に近付き、開く。

扉の先には、大きなサソリの刺繍が入った赤い服を身に纏い、同じくサソリの形をした金色の兜を被り、両手には金色の手甲を装備した老人が現れた。

この老人こそ、悪の組織デストロンの大幹部であった男・ドクトルG^{ガイ}である。

ドクトルGもまた、邪眼の力で蘇っていたのである。

ドクトルGはカーペットの上を歩き、キングの前に来ると、彼の持つ王の威厳に屈せず、独特な喋り方で話しかけた。

「キング、どうやら仮面ライダーがこの基地に侵入した。」

「そのようだな…これもお前の誇るデストロン怪人とやらが敗れたおかげだな。」

キングは皮肉っぽくほくそ笑みながらそう言うと、ドクトルGは口元を歪めて不快感をあらわにした。

「フン、そこまで言うのなら、今度は貴様の誇るファンガイアとかいう怪物の力を見せてもらおうか？」

そして言い返すように、今度はキングに向かって「お前の怪人ならライダーを倒せるのか」と問いかけた。

それを見ていたビショップはこのドクトルGから大幹部の気迫というものを感じ取り、非常に関心を示していた。

ファンガイアを含めて今までの種族の中で、キングに向かって強気な姿勢でいられた者など殆どいない。

それだけの強さと気迫がキングにはあるというのに、ドクトルGは物ともせず、それどころか簡単な挑発のような言葉まで使いながらキングと相對している。

それは強がっているからではない。

ドクトルGがキングに並ぶ強さを持っているからなのだ。

改めてビショップは、過去の悪の組織で暗躍した大幹部達の強さに感服し、その幹部達と自分達を蘇らせた邪眼の強大さに恐れにも近い敬意を抱いた。

無論、ビショップや他の幹部達と違ってキングは邪眼に敬語など使わず、屈服などしていないが。

「フフ…良いだろう…」

玉座に座っていたキングはゆっくりと立ち上がると、真っ直ぐにドクトルGを見据えた。

「ただし…戦うファンガイアは…」

そして、玉座の傍に突き刺さったザンバットソードを引き抜くと、背部の鞘に納める。

「この俺だ。」

キング直々の出陣…

この突然の事態にドクトルGは表情を強張らせ、ビショップは邪悪にはほ笑んだ…

…

「タアツ！セイヤツ！」

山の頂上に建てられた施設に侵入した響鬼は、二本の音撃棒を振るい、襲い来るデストロン戦闘員達を次々に叩き伏せながら建物内を搜索していた。

しかし、闇雲に戦って搜索をしていたのではない。

響鬼はあるものを探して建物の中を歩き回り、通路に設置されたエレベーターを使って施設の地下一階へと来ていたのである。

そして、その一室に入ると、今まで倒してきた者とは違う白いスーツの戦闘員の姿があった。

この戦闘員こそ、実験や改造手術の助手を行うデストロン科学員である。

「イイー!?!」

科学員は突然の仮面ライダーの出現に驚くと、響鬼は音撃棒を背部に収め、敵へと近寄った。

「お前がマニュアルに書いてあった科学員って奴か…おとなしくカードキーを渡したら、何もしないよ。」

響鬼は科学員が持っているカードキーを探していたのである。

最初に響鬼は施設の最上階に向かおうとしていたのだが、上へ向かう階段は二階までで隔壁が下りており、それより上へ上ることができなかった。

仕方なく二回を調べてみると、戦闘員が集まっていた部屋の一つでマニュアルを発見し、敵を一掃してからそれに目を通した。

そのマニュアルには、階段を遮る隔壁を開けるには科学員が持つカードキーが必要であるといった内容が書かれており、響鬼はカードキーを手に入れるために科学員を探していたのである。

「イ、イイー!!」

科学員はやけになって響鬼へと突進したが、響鬼は右手の鬼爪を伸ばすと、突進してきた科学員の腹部に当身の要領で突き刺した。

「イ…イイ…」

「悪いな。」

響鬼は敵の白衣のポケットからカードキーを抜き取ると、科学員は火の粉となって消滅した。

目的の物を手に入れた響鬼は、再び隔壁の閉じた階段へと向かった…

…

それからも響鬼は襲い繰る戦闘員達を蹴散らしながら、再び隔壁の前を訪れた。

手に入れた隔壁のカードキーを備え付けられていたスロットに通す

と、轟音を立てて壁が開き、その先へと続く階段が露になる。

「やれやれ、敵さんも面倒なことするなあ。」

響鬼は溜息をつくとき、ゆっくりとした足取りで階段を上っていった。

…

上の階に付くと、早速響鬼の前に多くの戦闘員達が現れた。

しかも全員が長いスティックを武器として持ち、鬼気迫る気配で迫ってくる。

しかし、響鬼は慌てなかった。

「はあああ…！」

二本の音撃棒を構え、先端の鬼石に力を集中すると、響鬼の体から白煙が上がり、鬼石に炎が灯る。

「セイヤツ!!」

そしてその炎を、向かってくる戦闘員に向けて投げつけた。

響鬼の得意技の一つである鬼棒術・烈火弾である。

「ハツ！セヤツ！ハアツ！」

『イーーーーー!?!』

響鬼は何発も炎を発射し、戦闘員達を一掃した。

雑兵の駆除を終えた響鬼は、さらに施設の調査を続けるのであった。

…

「…ん？」

三階の調査を続けるうち、響鬼はとても大きな西洋風創りをした扉を見つけた。

「何だこれ？」

現代の機械的な施設のつくりをしたこの建物の扉にしては、どこか不釣合いな印象を受けた。

左右のドアノブに手をかけてみると、どうやら鍵はかかっていないらしい。

どこことなく扉の置くから不気味な気配はしていたが、調査をしないというわけにもいかない。

響鬼は少しの胸騒ぎを感じながらも、扉を開けて中に入った。

…

響鬼が部屋に入ると、軋むような音を立ててドアが閉まる。

部屋の中は家具も機材も何も無い、ただ木製の床だけが広がっており、薄暗い部屋を部屋中の壁に備え付けられた蝋燭に灯った炎が照らしていた。

そして部屋の最深部には、首から下がっていた布製の鞘に一本の長い剣を収め、漆黒のローブと派手な西洋風の衣装を身にまとった茶髪の男の姿があった。

「貴様が響鬼とやらか？」

男はその冷たい眼光で響鬼を見つめると、響鬼の体に鋭い戦慄が走った。

響鬼の感覚は告げていた…

目の前に居る男はとんでもなく強く、冷酷な男だ。自分より遙かに長い間戦い続けてきた猛者だ…

響鬼は戦慄を振り払い、男を睨み返すと、仮面を揺らしながら言葉を発する。

「そうだけど、アンタは？」

響鬼が聞き返すと、男はにやりと笑って再び喋りだした。

「わが名はキング…チェックメイトフォーの頂点に立つ者…そして、ファンガイアの王だ。」

「なるほど…つまりラスボスって奴ね…ならこの嫌な感じも納得だ。」

「

響鬼は二本の音撃棒を再び構え、戦う姿勢をキングに示した。

例え相手がどんなに強くても、引き下がるわけには行かないのだ。

「アンタを今ここで倒しちゃえば、全部解決って奴かな？」

「ほう…俺を倒すか…貴様に出来るのか？」

キングの言葉と共に、響鬼に更なる戦慄が襲いかかる。

しかし、響鬼は動じずに、勇敢な態度を崩さなかった。

キングはそれを見るとにやりと笑って、鞘から剣を抜いて自分の傍に突き刺し、左手をまっすぐ伸ばした。

「俺の殺気に耐え抜くか…良いだろう、貴様の力がどれほどの物か見せてもらう…絶滅タイムだ！」

その言葉と共に、新たな盟友によって作り出された模造品のキバットバット？世が飛来し、「ガブリ！」の一言と共にキングの左手に噛みつく。

するとキングの両頬に左右二つづつ、計四つの七色の模様が浮かび

上がり、同時に腰部に無数の鎖「カテナ」が何重にも巻かれて黒いベルトを生成した。
そして最後に、キバットバット？世が逆さの姿勢でベルトへと取り付き、キングが呟く。

「変身…！」

その言葉と共にキングの体は銀色の輝きに包まれ、体に真紅と漆黒の彩の鎧を纏い、背に翼を模した二枚の黒いマントがはためくと、蝙蝠を象った仮面に備え付けられた二つの瞳が緑色に輝いた。
キングは模造された「闇のキバの鎧」を身に付け、仮面ライダーダークキバへと変身を遂げたのである。

ダークキバは自身の傍に突き刺した妖剣・ザンバットソードの柄を右手で掴み、引き抜くと、その切っ先を響鬼へと向けた。

「来るがいい…！」

ダークキバは低い声で響鬼を挑発するように呟く。

しかし、響鬼の長い経験から来る戦士の勘が、不用意な攻めを許さなかった。

無茶に攻め入れれば返り討ちにあう…どうかして相手の隙を付かねば…

響鬼は息を殺し、相手が攻めて来る時を待った。

攻撃してくる時こそ防御が手薄になり、相手に隙が出来るものなのだ。

「どうした…来ないのか？ならば、俺から行こう…！」

しかし、響鬼の慎重な姿勢を無駄なことだとあざ笑うようにダークキバはザンバットソードを構え、響鬼へと迫った。

それはまるでモチーフとなった蝙蝠の様に、凄まじいスピードで…

「速っ…!!」

響鬼がその速さに驚愕している間に、ダークキバのザンバットソードが振り下ろされる。

ファンガイア最強の魔剣であるザンバットソードは、一撃その身に受けただけでも凄まじいダメージを相手に与える。

この刃を受けるわけには行かない…響鬼はとっさに二本の音撃棒でザンバットソードの刀身を抑え、攻撃を防いだ。

「クッ…!!」

だが、凄まじい剣閃の衝撃が響鬼の体へと伝わり、響鬼は少し押し返されてしまう。

ダークキバはそれを見ると、響鬼を鼻で笑った。

「フッ…このキングの一撃を防いだか…だが、喜ぶのはまだ早いな！」

ダークキバは刀身を二本の棍棒で抑えられたまま、無理矢理と剣を振り下ろす。

その威力は音撃棒ごと、響鬼を硬い木の床に叩き付けた。

「うわあああ!?!」

響鬼は床へとめり込み、ダークキバは倒れた響鬼に向かって剣の切っ先を突き出す。

響鬼は何とかその攻撃を転がって回避すると、立ち上がってダークキバへと立ち向かった。

「ハア！セヤアツ！！」

響鬼は二本の音撃棒を巧みに操り、ダークキバへと素早い連続攻撃を何度も放つ。

しかし、対するダークキバはザンバットソードを用いて、全ての攻撃を刀身で防ぎ、攻撃を捌ききった。

「クツ…！」

「フン…ハアアアアア！！」

ダークキバは満足に攻撃も当てられなかった響鬼に若干失望すると、次は大きな雄叫びと共にザンバットソードを振るい始めた。

その剣戟は歯向かう者全てを切り捨てるといふ殺気、そしてキングが持つ王の気迫がこもった豪胆な者であり、尚且つ相手に隙を見せない俊敏さを秘めていた。

ダークキバの豪胆さと俊敏さを秘めた剣戟はまるで無数の蝙蝠が獲物に牙で喰らい付くように、響鬼を切り刻んだ。

そしてある程度斬撃を浴びせ終わると、ミドルキックを響鬼の腹部に叩きこむ。

「うあああああ！！」

ダークキバのキックの威力に、響鬼は凄まじい勢いで吹っ飛ばされた。

だが、部屋の壁に激突する寸前に響鬼の背後に黒いキバの紋章が現れ、響鬼の体を拘束した。

この紋章は、ダークキバが生成した結界である。

「ぐっ…あああああ…！！」

結界に捕らわれた響鬼は、紋章から迸る黒い光に攻撃され、苦悶の叫びをあげた。

やがて結界が消え、響鬼は床の上に叩きつけられると、ダークキバはザンバットソードを構えてゆっくりと満身創痍の響鬼へと迫った。

「異世界の仮面ライダーとやらもここまでのようだな。トドメを刺させてもらっぞ…」

「クッ…！」

響鬼は片膝を立てて立ち上がり、音撃棒を構えなおすも、既にダメージは大きく、満足に敵と戦えるかは分からない。

いや、このままの姿ではおそらくダークキバに勝つことはできないだろう。

自身の最強武器である装甲声刃アイムドセイバーの力を使い、最大限の力を持って戦わなければ…

響鬼がそう考えていたその時、部屋の扉が音を立てて開いた。

「！？」

響鬼とダークキバが驚愕して扉の方を向くと、そこには青いシャツの上に白のジャケットを羽織り、ジャケットと同じ白のジーンズを履いた六十代くらいの年齢の男の姿があった。

「ほう、俺の後輩を苦しめているのは悪の仮面ライダーか…仮面ライダーの癖に、悪に魂を売った奴は許せんな。」

男はダークキバを真っ直ぐに睨んでさういうと、ダークキバは仮面の下に隠れた眉を潜め、男に問うた。

「…何者だ貴様？」

男はそれを聞いてニヤリと笑うと、ダークキバを右手で指さし、その質問に答えた。

「俺の名は風見志郎。そして、そのもう一つの姿は…！」

男・風見志郎は両腕を右側に構え、ゆっくりと半円を描くように動かしていく。

「変身…！」

そして両腕を180度動かし終わると、左手を下げ、右手と入れ替わりで一気に45度鋭く突き出す。

「V3（ブイツスリヤー）…！」

まるで仮面ライダー1号と仮面ライダー2号の変身ポーズを合わせたようなポーズを取った風見の腰に、「V3」の掛け声と同時に左右に風車が付いた白いベルトが現れる。

「トオツ…！」

そしてベルトの2つの風車が回り始めると同時に、空中へとジャンプした。

回り始めた風車からは凄まじいエネルギーがスパークし、男を赤い仮面と緑の体の戦士へと変える。

変身を終えた戦士は、2本の白いマフラーをはためかせながら着地すると、右手でVの文字を形作り、左手の2本の指を右手に添えながら高らかに叫んだ。

「仮面ライダー、V3!!!」

その戦士の名は仮面ライダーV3…悪の秘密結社デストロンから世界の平和を守った英雄の一人である。

今ここに、かつての英雄が自分達の意味を受け継いだ後輩を救うため、また一人駆け付けたのだった。

8話（後書き）

3人目は昭和でもトップクラスの人気を誇るV3です。

残る昭和の一人は…もう分かってしまいましたかね？

最近更新スピードが落ちて本当に申し訳ないです。

それにしてもカギを手に入れたり装置を操作するシーンはもっと増やした方がいいですかね？

実力の不足から結構描くのが大変だし、正義の系譜でもカギを探す場面が多すぎて嫌になったことがあるので極力減らしているのですが。

9話

ライダー3号！その名はV3！！

デストロンから世界の平和を守った英雄・仮面ライダーV3が、響鬼のピンチに駆けつけた。

力と技の戦士・ライダーV3は、白いマフラーをはためかせ、吸血鬼の王・仮面ライダーダークキバへと完全と立ち向かう！

「響鬼！しつかりしろ！」

V3は響鬼にかけよると、素早く手を差し伸べた。

響鬼は手を取って立ち上がると、V3に軽く頭を下げる。

「イテテ…すいませんねえ、ライダーV3。」

響鬼は大ショッカーとの決戦時、そして数ヶ月前のショッカーとの戦いで仮面ライダーV3と共に戦っている。

話したことはなくても、お互いが分かり合うには同じ戦場で共に戦うことだけで十分であった。

仮面ライダー達は、ほんの少し手を取り合うだけで友情を結ぶことができるのである。

そしてダークキバは覇気を込めたその緑の瞳をV3へと向け、話しかけた。

「貴様が仮面ライダーV3か…？」

「そうだ！俺が仮面ライダー3号！仮面ライダーV3だ！」

V3は再びトレードマークであるVのサインを両手で作ると、再びダークキバへと名乗った。

仮面ライダーV3・風見志郎。1号の本郷猛とは大学の先輩後輩の間柄である。

ゲルシヨツカーの次に出現した秘密結社・デストロンに父、母、妹を殺され、自身も重傷を負った彼は、仮面ライダー1号、2号による改造手術を受け、改造人間となった。

その後、デストロンとの戦いで行方不明となったダブルライダーから日本の平和を託されたライダーV3は、自身に秘められた26の秘密と、1号、2号から受け継いだ力と技を駆使し、平和を守りぬいたのである。

そしてデストロンとの戦いの後も最も多く後輩ライダーを助けるために活躍した彼は、正に1号、2号と並ぶ仮面ライダーの中心的存在といえる存在であった。

V3の燃え上がる闘志は、ファンガイアの王を前にしてもまったく怯まない。

ダークキバは自分にまったく恐れを見せないV3の態度が気に入らず、仮面の下で眉を潜めた。

「俺を恐れぬか…良いだろう、貴様がどれほどの兵か見せてもらおう…！」

「良いだろう！行くぞ！悪の仮面ライダー、ダークキバ！」

ダークキバはザンバットソードを構え、V3はファイティングポーズを取ってダークキバへと立ち向かう。

赤いライダーと黒いライダーの激闘が幕を開けた。

「ハッ！」

ダークキバは再び滑らかな太刀筋で剣を振るい、剣戟でV3に攻撃を仕掛ける。

模造品とはいえ、今までキングに歯向かう者をすべて地獄に落とし

てきた剣と同じ力を持つ妖刀・ザンバットソード。
一太刀でも浴びれば苦戦は必至…だが…

「トオオオオオツッ！！」

V3はその剣戟を鮮やかな動きで回避し、すぐさま剛胆な拳と蹴りでダークキバへと攻撃を仕掛ける。

V3の異名は「力と技の戦士」。

その由来の秘密は、V3の腰に巻かれた命のベルト・ダブルタイフーンにある。

ダブルタイフーンの左右二つの風車の右には仮面ライダー1号の持つ「技」があり、左には仮面ライダー2号が持つ「力」がある。

この「力」と「技」は、1号と2号が自分達を助けるために傷ついた志郎を救うため、決死の思いで改造手術をした証であった。

V3は、ライダー1号から受け継いだ「技」で多くの必殺技を操り、ライダー2号から受け継いだ「力」で数多の敵を蹴散らしたのである。

デストロンとの戦いから長い年月が過ぎ、ある程度老いた今でさえ、V3の力と技は一級品である。

それは、ダークキバが相手であろうとまったく苦にしない。

徐々にダークキバは、刀身でV3の攻撃を防ぐ回数が多くなり、防戦が主体になっていく…

「こいつ…中々やるものだ…！」

ダークキバ・キングは、V3の予想以上の戦闘能力に驚いていた。ドクトルGから聞いてはいたが、この世界の熟練の仮面ライダーは非常に手強い。

何百年も戦ってきた自分にもまったく劣らない凄まじい強さだ。中々有利に戦闘を進められない。

「先輩！俺も行きますよ！セイヤー————！！」

そして響鬼もまた、音撃棒を構えてV3に加勢をし始めた。

V3の格闘技と響鬼の二本の棍棒、二人のライダーの攻撃はさらにダークキバを追い込んでいく。

やがて二人のライダーはザンバットソードを払いのけ、V3は拳を弓のように一旦引き、響鬼も右手の拳に五本の鬼爪を生やして拳を構えた。

「V3パンチ！！」

「テヤアツ！！」

V3のV3パンチと響鬼の鬼爪を用いたパンチが、ダークキバの胸部へと命中する。

強烈な攻撃を受けたダークキバは後方に後ずさると、予想と違ったとでも言うように舌打ちをした

「チツ…一人増えただけでここまで…！」

キングは悟った。

ライダーの力は自分が思っているよりもずっと強い。

自分とて気を緩めれば負けてしまうかもしれない。

多少本気を出して戦わなければ…

ダークキバが思考を巡らせていたそんな時、独特の発音をした声がライダー達とダークキバの耳に届いた。

「仮面ライダーV3！久しぶりだなあ！」

「！？？」

ダークキバを含めた三人のライダーは、声が聞こえた方向：部屋の入り口の扉を振り返る。

そこには、斧と盾を持ったドクトルGの姿があった。

「貴様は、ドクトルG！」

V3は、ドクトルGの姿を見た瞬間身を乗り出して声を張り上げた。響鬼はそんなV3を見て、気になってドクトルGの正体を問う。

「先輩、あの変な被り物被ったオッサン誰なんですか？」

「奴の名はドクトルG…俺が以前倒した、デストロンの大幹部だ！」

ドクトルGは昔、仮面ライダーV3を倒すために海外からやってきた大幹部であった。

ドクトルGが引き連れた怪人達は高い戦闘能力を持っており、数多くの怪人がV3を苦しめた。

この恐るべき大幹部の力は、V3が一番分かっているのである。

ドクトルGは次にダークキバの方を見ると、ニヤリと微笑しながら口を開いた。

「キング、ファンガイアとやらの力はよくわかった。だが、そろそろ撤退してもらおうぞ。」

「貴様…このキングに指図するか…！」

ドクトルGの言葉が癢に障ったダークキバは忌々しげにつぶやくが、ドクトルGはそんな不満も気にせず、話を続ける。

「そろそろ向こうからナノマシンビールスが送られてくる時間だ。

我々はこと第二アジトに設置されたビールス散布装置を守らなければならぬ。戦いは後回しだ。」

「クツ…！」

ダークキバは舌打ちをし、構えていたザンバットソードを下げた。そしてドクトルGは、再びV3へと視線を向ける。

「ライダーV3！勝負はお預けだ。」

「ドクトルG！貴様ら、一体何を企んでいる！？」

V3は敵の計画を知るため、強い口調でドクトルGへと問いただした。

「戦っていれば何れ分かるさ。その時は、今度こそこのドクトルGの力で貴様を地獄へと叩き落としてくれる！さらばじゃ！」

ドクトルGはその言葉を最後に、ダークキバと共に姿を消した。

そして残されたV3と響鬼は、変身を解除すると、歩み寄って握手をした。

「仮面ライダーV3の風見志郎だ。」

「ヒビキです。よろしくお願いしますよ風見先輩。シュツ！」

ヒビキは握手を解くと、額に指で形作った独特のサインをかざすヒビキ特有の挨拶で答えた。

風見はそんなヒビキの姿を見て微笑むと同時に、彼が着ている和装に注目した。

「それにしても、すごい服を着ているな。」

「ハハ、笑わないで下さいよ。これでも幼馴染の手作りなんです。」

ヒビキは風見の視線に苦笑し、冷や汗をかいた。

そしてすぐに二人とも生真面目な表情に変わると、風見の方からヒビキに話しかけた。

「とにかく、今は奴らの計画を暴くことが先決だ。俺は奴らを生か返らせた存在に心当たりがある。歩きながら話そう。」

「そうですね…それじゃ、頑張りますか！」

響鬼とV3…

ここにもまた、新世代と旧世代のタッグが実現した。

9話（後書き）

読み直してみると剣・X編と他の話に差がありすぎる…平等に描くべきかもしれないね…

ドクトルG役の千葉丈太郎さんは未だに現役で俳優を続けられているベテランですので、ドクトルGのイメージはオリジナルにしているだけでは幸いです。

それと、実は響鬼編の敵は戦国繋がりでノブナガにする予定もありましたが、オーズは現行作品ですのでやめちゃいました。

でもノブ君は映画限定だし…そっちにした方よかったかな…？

仮面ライダー達が現在戦っている場所とはまた違った場所の部屋の
一室…

灯りの少ない薄暗い部屋の中心に、一つの巨大なカプセルが置かれ
ていた。

カプセルは緑色の培養液で満たされており、ゴポゴポと音を立てる
液体の中には、二つの異形の影があった。

その異形の一つは、仮面ライダーが最初に戦った悪の組織・シヨッ
カーのマークと同じワシの姿をかたどった怪人…

三ヶ月前のシヨッカーとの戦いで1号、2号のダブルライダーによ
って倒されたシヨッカーメダルから作られた最強の怪人であるシヨ
ッカーグリードである。

そしてもう一つの異形の戦士は、白銀の輝くボディと、両足の踵に
装備されたレッグトリガー、腰部のベルトに収められた青いキング
ストーン「月の石」が最大の特徴であるバツタの戦士…

かつて暗黒結社ゴルゴムの影の王子と恐れられ、仮面ライダーBL
ACK RX・南光太郎の最愛の親友であり、同時に史上最大の宿
敵・シャドームーンであった。

カプセルの中に入れられた二人のうち、シヨッカーグリードの方は
すでに意識がなく、ぐったりと頭をたれて液体の中を漂っている。
だがシャドームーンは、力のあまり入らぬ体を振り絞って必死に意
識を保っていた。

「クッ…このシャドームーンにこれほどの屈辱を味あわせるか…！」

シャドームーンの戦士としてのプライドは大きく傷つけられ、計り
知れぬ怒りが彼の心の中を燃え滾っていた。

だが、このカプセルの中から脱出することは出来ない…

意図的に不完全な体力のまま復活させられ、キングストーンに残されたエネルギーも僅かしかないのだ。

そんなシャドームーンが入れられたカプセルの前に、紫色のスパークとともに不気味な一つの眼球が出現した。

以前、時空攻防戦で仮面ライダーBLACKとシャドームーンを捕らえようとした先代のゴルゴム世紀王・邪眼である。

『クツクツク…無様な影の王子よ…』

「邪眼…貴様あ…！」

邪眼はシャドームーンの姿をあざ笑い、彼の腰部のベルトに納められたキングストーンに視線を移すと、また不気味な声色で声を発した。

『シャドームーン…貴様はそのキングストーンを我に与えるため蘇らせた…今度こそ、我が創生王となるための礎となつてもらうぞ。』

「フン…バカめ…肉体のない今の貴様に、キングストーンが扱えるものか！」

シャドームーンの言うとおりであった。

ライダー大戦の影響で蘇った邪眼は、再び精神体として生を受けた。以前はHS-184という素体をヨリシロとして肉体を得たが、もうその素体も存在せず、体にキングストーンを持つことができない。しかし、邪眼は不気味に笑ったまま余裕を崩そうとはしなかった。

「クツクツク…そう、今の我に肉体はない…それならば、新たに創れば良いだけのこと！」

邪眼の叫びとともに、カプセル内に紫色のエネルギーが迸る。

そのエネルギーはシャドームーンとショッカーグリードの体を近づ

けて密着させ、生々しい音を立てながら銀色の体と鷲の体を融合させていった…

「グアアアアアアアアアア！」

『ハツハツハツハツハ！！シャドームーンよ、有難く思え！我はキングストーンだけではなく、貴様その物を我の物としてやろう！その為に最強の欲望の化身と融合し、究極を越えた究極の肉体となるのだ！！』

ゆっくり、ゆっくりと、シャドームーンの意識がかき消されていく…世紀王のプライド、RXへの敵対心、シャドームーンのすべてが…ショッカーグライドの体と混ぜ合わさりながら消滅していった…消えていく意識の中で、シャドームーンは一人の男の名を呟いた…自分の宿敵であり、親友であった、一人の男の名を…

「RX…南…光太郎…」

…

一人の少年と一匹の青鬼が、広々とした高原の一角に立てられた謎の大きな施設へと入っていった。

仮面ライダーNEW電王こと野上幸太郎、そしてその相棒のテディイマジンである。

二人は建物のエントランスに入ると、機械的なデザインの青い壁で作られた室内を見回した。

「テディ、ここが例の場所なんだな。」

「ああ。この建物も、調査に入った何人も人間が行方不明になっている。何者かの陰謀が絡んでいることは間違いないだろう。」

今二人がいる建物も他のライダーたちが調べている施設と同じで、

最近突如現れた謎の建物である。

調査に入った人間たちも、すべて行方不明となって帰ってくる事はなかった。

いったい何がこの建物の中で起きたのだろうか？調査に入った人間たちはどうなったのか？

幸太郎とテディはそれを調べ、原因を突き止めなければならないのである。

「とにかく急いで調査して、他のライダーと合流しよう。」

「ああ、そうだなテディ…！？」

幸太郎がテディに相槌をうとうとした瞬間、突然二人の前に黒いスーツと白い仮面を身につけたまるでサイボーグのような戦闘員が二人出現した。

クライシス帝国の戦闘員・チャップである。

「幸太郎！こいつらはクライシス帝国のチャップだ！」

「やっぱり、今回の事件には悪の組織が絡んでたんだな…！」

幸太郎は凜とした瞳で二人のチャップを睨むと、右手の指を二回鳴らして右隣にいたテディの方へ掌を差し出した。

「テディ！来い！」

「おう！」

テディは幸太郎の宙にジャンプし、青く体を輝かせると、先端に銃口が備え付けられた青い剣「マチェーテディ」へと変形し、幸太郎の手に収まった。

幸太郎はマチェーテディを構えると、二人のチャップに向け立ち向かった。

「うおおおおおおお！！」

『~~~~！?』

チャップは機械的な声で自分達に剣を向けて挑んでくる少年に驚いたが、幸太郎は素早い動きでマチエーテディを振るい、呆然としているチャップを斬り付ける。

あっという間にチャップは地面に倒れ伏すと、オレンジ色の火の粉となって消滅した。

『幸太郎、やったな。』

チャップを倒し終わると、マチエーテディの柄に付いた鬼の顔のような部分…つまりテディの頭部である個所の口部がちがちと歯音を立てながら動き、声を発した。

幸太郎はそんなテディの顔面部分を見ながら、口を開く。

「いつチャップ達が襲ってくるかわからない。テディ、暫くそのままの姿でいてくれ。」

『分かった!』

幸太郎はマチエーテディを手に持ったまま、建物の奥へと向かっていった。

そしてそれからすぐあと、施設の入口に白の上着とズボンに身を包んだ一人の男が現れ、幸太郎達の後を追うように建物の奥へと向かっていった。

…

幸太郎はマチエーテディを片手に、怪しいところを調べ、襲い掛かるチャップを切り捨てながら、施設の中を駆け巡った。

やがて幸太郎は施設の地下に足を進めると、そこで何かの資材を運ぶチャップ達を発見した。

「あいつら、何をやっているんだ？でも。これはチャンスだ…」

幸太郎はこの施設で何が行われようとしているかを知る絶好の機会だと伺うと、気付かれぬようにひっそりとチャップ達を追った。

…

幸太郎はチャップを追い続けた。

途中何度も振り返るチャップの目をかわし、物音を立てぬようゆっくりと歩き、敵を追ったのである。

そしてついに、チャップ達は一つの大きな自動ドアの前で足を止めた。

二人のチャップの内、一人がカードキーを取り出し、ドアの電子ロックに通そうとしたその時、物陰に隠れていた幸太郎が飛び出した。

「待て！」

『！？』

幸太郎の出現にチャップは驚き、振り返る。

その隙を狙い、幸太郎はマチェーテの銃口をチャップ達に向け、2発の銃弾を発砲した。

銃弾は二人のチャップの胸を貫き、倒すと、カードキーを通そうとしていた個体が手からそれを落とした。

そして幸太郎はチャップの死体に近付くと、落としたカードキーを拾い、それを電子ロックに通して部屋の中へと入っていった。

…

「これは…」

幸太郎が入った部屋は、巨大な兵器の製造室であった。

クレーンやベルトコンベアーによって部品が運ばれ、オート機能で動く無数のアームによって組み立てや溶接が行われていく。

その兵器は最新型の兵器製造用機械によって、着々と完成しつつあったのだ。

だが、幸太郎が驚いたのは巨大兵器を発見したからだけではなかった。

その兵器が、幸太郎のよく知る「列車」とよく似ていたのである。

「デン…ライナー…？」

この恐ろしい列車型の兵器は、幸太郎のよく知る時の列車・デンライナーによく似ていたのだ。

先頭部のコックピットは禍々しい眼のような造形をしており、車体にはミサイルポッドやビーム砲といった数々の兵器が搭載され、毒々しい赤紫色のカラーが凶悪さを醸し出していた。

それは時を渡る目的で作られたデンライナーと違い、破壊と殺戮のみを目的として造られたといっても過言ではない恐ろしさを秘めていたのである。

「あの兵器は一体…？」

幸太郎は呆然としながら、そのデンライナーに似た兵器を見つめる。そんな時、不気味な鳴き声が幸太郎と、マチエーティイとして握られたティイの耳に響いた。

「ケツケツケツケツケ…！」

「！…？」

幸太郎は驚いて後ろを振り向くと、そこにはカマキリの姿をした異形の怪人の姿があった。

クライシスの怪魔獣人・ガイナカマキルである。

「怪人…！」

「小僧…よくもジェノライナーを見たな？」

「ジェノライナー？」

幸太郎は聞きなれぬ単語に疑問符を浮かべると、ガイナカマキルはじりじりと幸太郎に迫りながら説明を開始した。

「この列車の名前だよ。これはすべての世界を侵略するために我々が作り上げようとしている最強の時の列車だ！完成した暁には、すべての世界が火の海だろっさ！」

「何！？」

幸太郎は知った。

つまりこの兵器…ジェノライナーを使った全ての世界の破壊が、目の前にいる敵たちの計画であったのだと…

次に幸太郎は、この施設を調べるためにやってきた人間たちの安否が気になった。

「おい！ここを調べに来た人たちをどうしたんだ！？」

「クツクツク…皆殺してやったよ。秘密を探ろうとしたものは生かして帰さん！小僧！貴様も死ね！」

ガイナカマキルは武器である鎌を両手に構え、幸太郎に襲い掛かる。幸太郎は怒りのこもった瞳で敵を睨むと、マチエーデイを片手で後ろに引いた。

「テディ！行け！」
『おう！』

そして幸太郎は、思い切り剣を敵に向けて投げつける。
投げられたマチェーテディは凄まじい勢いで回転しながら、ガイナ
カマキルをその刃で切り裂いた。

「グオツ！？」

幸太郎はガイナカマキルが怯んだ隙に、黄金色のベルトを取り出し、
腰に装着した。

NEW電王へ変身するための変身ベルト・NEWデンオウベルトで
ある。

それからバックル部の横の四つのボタンの内、青いボタンを押して
ベルトの電子音を鳴らすと、デンライナーへの乗車券でもあり、電
王の力を引き出すためのツール・ライダーパスを、幸太郎は右手に
持って構える。

「変身！」

そして「変身！」の掛け声と共に、デンオウベルトの中心部に備え
付けられた時計の針に似た箇所に、ライダーパスをかざす変身を遂
げるための行為、「セタッチ」を行った。

『Strike Form』

するとベルトから電子音声がながれ、幸太郎の体を粒子状のエネル
ギー「チャクラ」が纏った。

そのチャクラは幸太郎の身を青いスーツと仮面に包むと、今度はレ
ールの形を象った鎧「オーラアーマー」が無数にスーツを纏った幸

太郎の周りに、出現しスーツに装着されていく。

最後に、鋭い形をした桃が割れたような造形の二本の赤い複眼が、青い仮面に装着されて輝くと、幸太郎は青い仮面ライダーへと変身を完了した。

このライダーこそ、仮面ライダー電王の孫であり、幸太郎のライダーとしての姿、仮面ライダーNEW電王である。

NEW電王は戻ってきたマチエーテディを掴むと、その切っ先をガイナカマキルへと向けた。

「ら、ライダー！？なぜここに!？」

ガイナカマキルはNEW電王の登場に驚き後ずさると、NEW電王は指を鳴らして敵を指差した。

「お前らの悪事…邪魔しに来たんだよ！」

「おのれえ…ジエノライナーに手出しはさせんぞ！死ぬ仮面ライダー!！」

ガイナカマキルは両手に武器である鎌を持つと、NEW電王に一足飛びで襲い掛かった。

だがNEW電王は軽やかな動きでマチエーテディを扱って防ぎ、敵の攻撃を受け流すと、鮮やかな太刀筋で愛剣を振るい、ガイナカマキルへの攻撃を開始した

「ハッ！」

NEW電王はまるで一陣の風のような素早い剣劇を駆使し、ガイナカマキルを攻め立てた。

切上、切下、横薙…様々な方向から、マチエーテディの刃が怪人を攻めたてる。

その力の差は圧倒的であった。

NEW電王とテディの、戦士とその武器としての相性は最高であり、その絆が扱うものの戦闘能力を高め、怪人達を切り捨てるのである。

「チツ：おのれ仮面ライダー…！」

ガイナカマキルは舌打ちをしてNEW電王から距離を取ると、武器を構え直し、再びNEW電王へ向け走り出す。

「このガイナカマキルが、貴様ごときにやられるものかあああああああー！」

激高したガイナカマキルは、NEW電王への殺意を滾らせて走る。

だがNEW電王は怪人の殺意を目の前にしても慌てず、手に持ったマチエーテディがNEW電王へ向け再び口を開いて話しかけた。

「幸太郎！カウントダウンだ！いくつにする？」

「10：いや、8で行ける！」

「分かった！」

会話を終えたNEW電王は再びマチエーテディを構えると、ガイナカマキルへと向けダッシュした。

同時に、マチエーテディが指定された秒数をカウントしていく…

『8』

ガイナカマキルと対峙したNEW電王は思い切り剣を振るって敵の武器を手から跳ね飛ばし、

『7』

すかさず頭部にキックを叩きこんで後退させ、

『6』

再び滑らかな太刀筋の剣劇をなんども敵に浴びせ、

『5』

切っ先の銃口を敵に密着させて発砲し、吹き飛ばす。

「グアアアアアア!?!」

至近距離で銃弾を受けたガイナカマキルはNEW電王から離れた位置まで吹っ飛ばされると、NEW電王は右手にライダーパスを持ち、デンオウベルトの中心部にかざした。

『4』

『Full Charge』

カウントと電子音声が同時にハーモニーを奏でると、桃色の「フリーエネルギー」がベルトから進ってマチエーテディへと流れ移った。

『3』

「ハッ!」

NEW電王は宙へとジャンプ、フリーエネルギーを纏って輝くマチエーテディを上段に振りかぶった。

そして、よろよろと立ち上がったガイナカマキルへと急降下していく…

『2』

ガイナカマキルはNEW電王が迫るその光景に言葉を失い…

『1』

NEW電王はマチエーテディを振り下ろして、唐竹割にガイナカマキルを切り裂いた。

「グギャアアアアアア！」

ガイナカマキルは断末魔の雄たけびをあげ、地面に力無く倒れる。NEW電王はガイナカマキルに背を向けると、構えていたマチエーテディを下げた。

『0』

そしてテディが数えていたカウントが0になると共に、ガイナカマキルは爆発して消滅した。

このガイナカマキルを葬った技こそが、NEW電王の使う必殺技の一つであり、最も多用する「カウンタースラッシュ」である。

…

戦いを終えたNEW電王はジェノライナーを破壊するため、製造設備のコントロールパネルに自爆装置のような物はないものかと探した。

やがて自爆スイッチらしきものは見つけたが、押しても何も起こらなかった。

どうということかと周りをまた探してみると、一冊のファイルを発見する。

そのファイルには「ジェノライナー製造設備に設置された緊急自爆スイッチについて」と表紙に書かれており、NEW電王はそれを開いて目を通す。

そこにはこのように書いてあった。

『緊急時のジェノライナー破壊のため、製造設備に自爆装置を設置する。』

起動方法は、コントロールパネルに備え付けられたスロットに専用のカードキーを通すことで自爆システムの電源が入り、スイッチを押すことで自爆シークエンスが始まり、カウントがゼロになるとともに爆発する。

万が一自爆装置を起動した際には、速やかに生産施設から退去すること。

なお、自爆システムのキーは怪魔ロボット・デスガロンへと所持させる。』

と…

NEW電王は再びコントロールパネルを見ると、自爆スイッチの傍にカードスロットを確認した。

どうやらファイルの内容は正しいようだ。

「なるほど、つまりこのデンライナーの偽物を壊すには、そのキーつてやつが必要なのね。」

『そうと決まれば行こう幸太郎！奴らの野望を砕くんだ。』

「ああ！」

NEW電王はマチエーテディを手に、ジェノライナー製造室を後にした。

この先にどんな敵が待ち受けるのだろうか？それはまだ誰にもわからない。

10話（後書き）

NEW電王編です。これがまた三話書き終われば、ブレイド編を再開したいと思います。

Wリターンズエターナル編の要素も入れる予定なので矛盾するかもしませんが、それでもよければお付合ください。
しかし最近の感想の無さから自分の力不足を嘆くばかりです。

11話

ジエノライナー破壊のため、NEW電王は自爆装置起動のためのカードキーの搜索を開始した。ファイルから得た情報によれば、キーはデスガロンという怪人が持っている。

恐ろしい兵器を破壊するためには、怪人を倒してそれを奪わなければならぬのである。

「ハッ！うおおおおお！！」

NEW電王は襲い掛かるチャップ共をマチエーテデイで切り倒し、施設の地下に備え付けられた部屋から部屋、倉庫という倉庫を搜索した。

その中で、ジエノライナーの詳しい性能を記した書類、何らかのパワードが書かれたファイル等を見つけたが、デスガロンは見つからなかった。

しかし、NEW電王は手に持ったテデイと共に、根気よくキーの搜索を続けていく。

そしてまた新たな部屋を発見し、中へと入った。

「ここは…」

その部屋の中には銃やミサイルランチャー、爆弾といった大量の武器が保管されたかなり広い倉庫であった。

NEW電王はドアの傍にあった階段を下りると、倉庫内を見まわした。

『ここは武器倉庫か…しかし、凄まじい数の武器だな。』

「奴ら、ジェノライナー以外にもここの武器を使って世界征服に利用するつもりなのか…？」

見渡す限り武器の山…しかも威力は人間が作る武器よりずっと殺傷力が高いと思われた。

こんな物を使って世界征服を企むなど、絶対に許されるものではない。

一刻も早くジェノライナーを破壊し、移動手段兼大量殺戮兵器を使った敵の計画を阻止しなければ…

そう考えていたNEW電王の元に、上から一発の光線が飛んできた。

「!?!」

NEW電王はとつさに後ろに後転して攻撃を回避すると、一体の怪人が倉庫の床へと着地した。

立ち上がったNEW電王はマチエーテディを構え、怪人の方に視線を移すと、怪人の全容が明らかにある。

その怪人は右手にビームキャノン、左手に鋼鉄のクローを装備した、巨大なタンク状の頭を持つロボットタイプの怪人であった。

クライシスの怪魔ロボット・キューブリカンである。

「クツ…また怪人か…！」

「仮面ライダー！これ以上我々の邪魔はさせん！死ぬがいい！」

キューブリカンはビームキャノンを発射し、NEW電王に攻撃を仕掛けた。

NEW電王はそれをジャンプで回避すると、空中でマチエーテディを上段に振りかぶる。

「うおおおおお！！」

そして急降下しながらの一閃をキューブリカンに向かって振り下ろした。
しかし、キューブリカンは左手のクローでマチエーテディの刀身を難なく防ぎ、逆にNEW電王の動きを封じる。

「なっ…！」

「その程度の威力で、このキューブリカンのボディに傷をつけられるものか！ハッハッハッハ！！」

キューブリカンはNEW電王を嘲笑うと、右手のビームキャノンの砲身を彼へと向け、至近距離で光線を発射した。

「うわあああああ！！」

NEW電王は凄まじい勢いで吹っ飛ばされると、金属で出来た床の上へと叩きつけられた。

「クッ…ならこれで！」

だがすぐさま立ち上がり、マチエーテディの銃口をキューブリカンへと向け、数発発砲した。

しかし、マチエーテディから放たれた銃弾もキューブリカンの装甲に弾かれ、大したダメージを与えることはできない。

自分の能力と敵の能力の相性の悪さは明らかであった。

「これもダメか…！」

『幸太郎、奴の関節を狙うんだ。それしか勝機はない！』

「よし…分かった！」

NEW電王はマチエーテデイからのアドバイスを受け取ると、もう一度キューブリカンへの接近を試みる。

しかしその時、三体の黒いローブを身に着けた骸骨型の怪人が現れ、NEW電王へと襲い掛かった。

クライシスの怪人・スカル魔が二体と、リーダー格である角付きのスカル魔、スカル魔スターである。

三体の骸骨型の怪人は、武器である巨大な鎌を振るい、NEW電王のキューブリカンへの攻撃を妨害する。

「チツ…何なんだよこいつらは!？」

NEW電王もマチエーテデイで相手の鎌攻撃に対応したが、その隙を突かれ、再びキューブリカンが放ったビームがNEW電王に命中した。

「ぐああああああ!!」

「クツクツク…スカル魔!やれ!!」

ダメージを負ったNEW電王に、キューブリカンの指示を受けたスカル魔達が再び襲い掛かる。

「クソ…やられてたまるかよ!!」

NEW電王は立ち上がり、再びスカル魔達と戦ったが、暫く戦っているとまた隙を突かれ、NEW電王にビームが命中した。

敵はこれを繰り返し、じわじわとNEW電王を攻め立てていく。

これが敵の作戦であった。

一対一で戦えば、相性はこちらが勝っていても負ける可能性がないわけではない。

ならば複数で戦い、コンビネーションを利用して圧倒してしまえば

いいというのが敵の考えだったのだ。

キューブリカンとスカル魔達はこの作戦を使い、NEW電王を追い詰めていった。

やがてNEW電王は地面に膝をつき、荒い呼吸を繰り返す。

「ハア…ハア…」

「幸太郎！大丈夫か！？」

「ああ…負けるわけには…行かない！」

NEW電王は立ち上ってマチエーテデイの切っ先をキューブリカンとスカル魔達に向けた。

ここで負ければ、敵の兵器製造と世界征服計画を許すことになる。世界の平和を守る仮面ライダーとして、それだけは絶対に避けなければならぬのだ。

「仮面ライダー電王！これでトドメを刺してやる！」

キューブリカンは肩で息をするNEW電王へと向け、ビームキャノンの砲身を向ける。

先ほどより大きな威力のビームが来る…直感したNEW電王はマチエーテデイの柄を握りしめた。

だが、ビームが発射されようとした直前、倉庫内に凄まじいシャウトが木霊した。

「待てッ…！」

「！…？」

NEW電王とキューブリカン達は、一斉に武器庫の入り口のドアを振り返る。

そこには、白い上着とズボンを身に着けた四十代程の年齢の男性の

姿があった。

そして、キューブリカンはその男についてよく知っていた。

「き、貴様は、南光太郎!？」

「久しぶりだな…怪魔ロボット・キューブリカン!」

青年の名は南光太郎…かつてキューブリカンを倒した男であった。光太郎はキューブリカン達怪人軍団をその凜々しい怒りを込めた瞳で睨むと、右手を高く掲げ、叫んだ。

「変身ッ!」

そして右手をゆっくりと下ろし、斜めに跳ねるように動かすと、握り拳にした左手を右手と交差させながら構えた。

まるで「r」、そして「x」の文字を描くようなポーズを取ったその瞬間、光太郎の腰に二つに分かれた赤い宝玉のような輝石が特徴的な金色のバツクルのベルトが出現した。

そのベルトの出現と同時に光太郎の体は太陽の光のような眩い輝き…例えるのなら、光のオーロラを身に纏い、彼を戦士の姿へと変えた。

遅く輝く黒いボディ、炎のように真つ赤な眼…「RX」と砕けた文体で胸に刻まれたシンボルマーク…

最後に腹部の「サンバスク」が再び眩い輝きを放つと、光太郎は変身を完了した。

そして再び両手で「RX」の文字を描きながら、黒い勇者は吼える。

「俺は太陽の子!仮面ライダーBLACK!!Rッ!X!!」

彼の名は、仮面ライダーBLACK RX!太陽が生んだ奇跡の超戦士である!

平和を愛し、熱く正義のロードを駆け抜けた伝説の勇者が、NEW電王を救うためここに参上した！

「トオツー!!」

RXは高くジャンプし、NEW電王の隣りに降り立つと、彼と視線を合わせた。

「大丈夫か、電王?」

「RX…どうしてここに?」

NEW電王は三か月前のショッカーとの戦いで全ての仮面ライダーに遭遇し、共に戦っている。

RXも、その際のNEW電王の知り合いの一人だ。

「俺も君のように、この施設を調べに来たんだ。それにここからは以前俺がライダー1号、V3、アギトと共に倒したある敵の気配を感じている。」

「ある敵の気配?」

NEW電王は首を傾げて疑問符を浮かべた。

しかし、そんな二人に向けてキューブリカンが叫ぶ。

「貴様ら!何をごちゃごちゃ話している!?二人まとめて地獄に送ってくれるわ!」

キューブリカンとスカル魔は、それぞれの武器を構えてゆっくりと二人のライダーに迫る。

RXはファイティングポーズをとり、NEW電王はマチエーテディを構え直すと、怪人達を赤い複眼で睨んだ。

「話は後だ！電王、俺はキューブリカンを倒す！スカル魔達は任せ
たぞ！」

「任せてくれ！先輩！」

二人のライダーはそれぞれの敵へと向け、戦いを挑んでいった。

：

「はあああああああ！！！」

NEW電王はマチエーテデイを振るい、スカル魔達が振り回す鎌攻
撃に応戦する。

三体一と敵の数は多かったが、スカル魔の戦闘能力はクライシスの
怪人達の中でもそれほど高くはない。

大物の怪人が居なければ、例え一人で十分優勢に戦える相手なのだ。
そしてある程度敵を弱らせると、先程のガイナカマキル戦のように、
テデイがNEW電王へと話しかけた。

「幸太郎！カウントは！？」

「5で十分だ！」

「分かった！」

カウントが決まり、NEW電王がライダーパスを片手に持つ。

その間にスカル魔達は鎌を振りかぶってNEW電王に迫る。

「オオオオオオオオオ！！！」

雄たけびを上げて走るスカル魔達の姿は、まさに悪鬼を連想させる。
しかし、NEW電王はそんな敵の姿にも怯まずに、ベルトにパスを
かざした。

『5』

『Full Charge』

電子音声と共にフリーエネルギーがマチエーテディへとチャージされ、NEW電王もスカル魔達へと向け走る。

『4』

「うおおおおお!!」

そしてすれ違いざまにカウンタースラッシュで一体目を切り裂き、

『3』

「ハッ!!」

すかさず二体目に剣戟を浴びせ、

『2』

「ヤアッ!!」

さらに最後に残ったスカル魔スターにもカウンタースラッシュを浴びせた。

『1』

『グギヤアアアア!!』

NEW電王の必殺剣を受けた三体のスカル魔は桃色のエネルギーを迸らせながら倒れ、

『0』

カウントがゼロになると同時に、すさまじい爆炎となって消滅した。

：

「行くぞ！キューブリカン！」

「RX！貴様に倒された恨み、晴らしてくれる！」

キューブリカンは怒りに任せるままに、RXに向けてビームキャノンを連射した。

かつてキューブリカンは、RXによって倒されたクライシス怪人である。

彼への恨みは凄まじかった。

「トアッ！」

しかし、RXはその身軽な動きでキューブリカンのビーム攻撃を物ともせず、敵へと接近した。

RXは奇跡の石「キングストーン」をその身に宿し、そしてまた長い年月を戦ってきた伝説の仮面ライダーである。

傷つく事を恐れず、世界のピンチを救うために戦ってきた彼は、並大抵の攻撃など物ともしない。

怪人を至近距離にとらえたRXは、逞しく、豪快なキックやパンチを駆使したアクションでキューブリカンに攻撃を仕掛けた。

「トアッ！タアッ！！！」

強力なライダーであるBLACKからさらに進化したRXは、スペックだけで言うならば並大抵の仮面ライダーを凌駕している。

キックとパンチの威力も伊達ではなく、その一撃一撃がキューブリカンの鋼の体を攻め立てていった。

「クツ…死ね！RX！」

キューブリカンはとっさに左手のクロウをRXに向けて突き出した。だが…

「トオツ！」

RXは軽々とジャンプして攻撃を回避した。

そして空中で体を捻り、両足に赤い輝きを回せてキューブリカンへと蹴り込んだ。

「RXツ！キーーーーック！！！」

RXキック…BLACKのライダーキックの三倍の威力を持ったRXの得意技であった。

赤く輝く両足はキューブリカンの顔に突き刺さり、敵の顔面をグシヤグシヤに潰した。

「ヴオオオオオ！！！」

キューブリカンは顔面を押え、痛みで激しく後ずさる。

その隙を逃さず、RXはベルトのバックル部「サンライザー」に右手を伸ばした。

「リボルケイン！」

RXがその名を叫ぶと共に、ベルトから一本の柄が伸び、それを右手で握ると共にゆっくりと引き抜く。

するとその柄から、光り輝く刀身が伸び、一本の杖となった。

この杖こそRXの必殺武器である「リボルケイン」である。
リボルケインを手にしたRXは、身を低くして地面を叩くと、高くジャンプした。

「トアアアアアアアアア！」

そしてリボルケインを突出し、キューブリカンへと急降下して、敵の腹部にリボルケインを突き刺した。

「グツ…ア…アアアア…！」

突き刺された個所から膨大な光のエネルギーを流し込まれたキューブリカンは苦しそうに呻き声をあげた。

RXはそれから一気にリボルケインを引き抜いて距離を取ると、ダイナミックなアクションでリボルケインを振るい、宙に「R」、そして「X」の文字を描いた。

そしてその文字が描き終わると同時に、キューブリカンは光の粒をまき散らしながら爆散した。

これがRXの必殺技「リボルクラッシュ」である。

…

戦いを終えた二人のライダーは変身を解除し、マチエーティはティエイマジンの姿へと戻り、お互い歩み寄った。

「RXの、南光太郎だ。」

「俺は電王の、野上幸太郎。漢字は違うけど、名前は先輩と同じだね。」

「ハハ、そうだな。」

幸太郎と光太郎は笑い合いながら握手をした。

そしてテディもまた、光太郎に手を差し出す。

「光太郎の相棒のテディです、宜しく。」

「ああ、こちらこそ頼むよ！」

光太郎は、イマジンであるテディとも、抵抗なく握手をして見せた。仮面ライダー達は見かけだけで怪人を悪とは判断しない。

光太郎もゴルゴムと戦っていた時、クジラ怪人というゴルゴム怪人と心を通わせたことがある。

正義のために戦う戦士に人の姿も怪人の姿も関係ないのである。

「それより先輩、奴等、デンライナーの偽者を作っていて…」

「ああ、俺もさっき確認してきたよ。だが…」

光太郎は眉間に皺を寄せると、表情を暗くした。

「幸太郎、この施設で作られているのはジェノライナーだけじゃない。あれと同等以上の兵器がここで作られているんだ！」

「なんだって!?!」

幸太郎は驚愕し、一步身を乗り出した。

光太郎はそんな彼の肩に手を置く。

「落ち着くんだ!俺達と一緒に、この施設で作られている兵器を破壊しなければならんだ!」

「ご、ごめん!でもこんな兵器を作る奴等の背後にいる奴って、本当に先輩が知っている敵な訳?」

幸太郎は内心の恐ろしさを全て隠せなかった。

あんな巨大な兵器を製造している敵達の背後に黒幕がいる。

どれだけ強大な敵なのか、想像も出来なかった。

「ああ、そいつは以前俺と信彦…シャドームーンのキングストーンを奪おうとしたとんでもなく恐ろしい敵だ。しかも今回は前回より規模が大きい計画を企んでいる。奴の力は…確実に以前より増しているよ。」

「そんな…」

幸太郎は肩を落とした。

そんな敵に自分たちは勝てるのだろうか？

だがそんな心を見透かしたのが、光太郎は鋭い眼光で幸太郎を見つめ、激励を開始した。

「弱音を吐くんじやない！俺達は全ての世界を守る為、決して負けることは許されないんだ！大丈夫、皆で力を合わせれば、きっと俺達はどんな強大な敵にも負けないさ！」

幸太郎はその言葉にはっとした。

確かに、弱音を吐いたところで始まらない。

傷つくことを恐れたら、地球は…全ての世界は悪の手に沈んでしまうのである。

そんなことを許すわけにはいかない。

自分達は平和の使者・仮面ライダーとなった戦士なのだから。

テディもその通りだと言う様に、幸太郎に向けて強く頷き、サムズアップを送っていた。

「先輩、俺が間違っていたよ…俺達は負ける訳にはいかない。だって勝たなきゃ、何も守れないから！」

「ああ！」

光太郎と幸太郎は、がっちりスクラムを組み、共に戦うことを誓い合った。

またここに、世代を超えたタッグが誕生したのである。

これで、仮面ライダー達の物語のプロローグを語るページは全て捲られた…

そして、戦士達を語り継ぐ新たな物語が、新たに始まるのである…

11話（後書き）

二話で纏まりそうだったのでまとめました。電王とRXの人気者コンビ…というより実は光太郎&光太郎をやリたかっただけだったり

…w

話は変わりますが「Wリターンズ エターナル編」を視聴しました。うん…予想以上に上手く話しに組み込めそうです。

次回から剣&X編が再開です。

剣崎と大道の、同じ永遠の命を持ちながら全く違う運命の上を歩いた物同士の戦いを描いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5301s/>

仮面ライダー 光の伝説

2011年10月8日23時11分発行